

# 箱 崎 8

—箱崎遺跡第11次・13次調査報告—

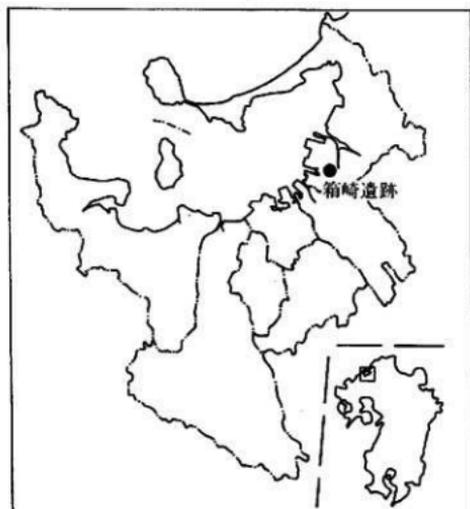
福岡市埋蔵文化財調査報告書第592集

1999

福岡市教育委員会

HAKO      ZAKI  
箱      崎      8

—箱崎遺跡第11次・13次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第592集



遺跡略号	調査番号
HK Z - 11	9712
HK Z - 13	9750

1999

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は病院建設および共同住宅建設に伴い調査を実施した箱崎遺跡第11・13次調査の成果を報告するものです。これらの調査では中世の集落跡を検出するとともに多数の輸入陶磁器が出土しました。これらは当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、費用負担など多くのご協力を賜りました山田國正氏・株式会社西日本総合リースをはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が病院建設および共同住宅建設に伴い、東区箱崎3丁目、同馬出5丁目地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第11次・第13次調査の報告書である。
2. 本書で報告する各調査の細目は以下のとおりである。

調査回数	調査地	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
第11次	東区箱崎3丁目3266-1外	9712	H K Z - 11	385㎡	1997.4.30~6.27
第13次	東区馬出5丁目520・521	9750	H K Z - 13	297㎡	1997.10.27~12.2

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は第11次調査を榎本義嗣、依寛司・橋本幸樹(九州大学学生)、第13次調査を佐藤一郎が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は第11次調査を榎本、小川光彦(琉球大学大学院生)、稲田健二(福岡大学学生)、第13次調査を佐藤一郎が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は第11次調査を榎本、第13次調査を佐藤が行った。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は第11次調査を榎本、第13次調査を佐藤が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は第11次調査を榎本、林田恵三、第13次調査を佐藤、藤村住公恵が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°40'西偏する。
9. 遺構の呼称は井戸をSE、土坑をSK、ピットをSPと略号化した。
10. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 本書の執筆はI. - 1. - 2)、IV. を佐藤が、他を榎本が行った。
12. 本書の編集は佐藤の協力を得て、榎本が行った。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
1) 第11次調査	1
2) 第13次調査	1
2. 調査の組織	1
1) 第11次調査	1
2) 第13次調査	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 第11次調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	8
1) 井戸	8
2) 土坑	20
3) その他の遺物	40
3. 結語	42
IV. 第13次調査の記録	43
1. 調査概要	43
2. 遺構と遺物	44
1) 井戸	49
2) 土坑	51
3) その他の遺構	51
4) 出土遺物	52
3. 結語	52

## 挿 図 目 次

第1図	箱崎遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図	箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000)	4
第3図	第11次調査区位置図(1/1,000)	5
第4図	第11次調査区遺構配置図(1/150)	6
第5図	第11次調査区北壁土層実測図(1/100)	7
第6図	SE002実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/2、1/3)	9
第7図	SE004・027実測図(1/40)	10
第8図	SE004出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	11
第9図	SE004出土遺物実測図(2)(1/3)	12
第10図	SE027・033出土遺物実測図(1/2、1/3)	13
第11図	SE031実測図(1/40)	13
第12図	SE033実測図(1/40)	14
第13図	SE035実測図(1/40)	15
第14図	SE037実測図(1/40)	16
第15図	SE037出土遺物実測図(1/1、1/2、1/3)	17
第16図	SE038・039実測図(1/40)	18
第17図	SE038出土遺物実測図(1/2、1/3)	19
第18図	SK001・003・005・006・007・010実測図(1/40)	21
第19図	SK001出土遺物実測図(1/3)	22
第20図	SK003出土遺物実測図(1/3)	23
第21図	SK005・006・007出土遺物実測図(1/2、1/3)	24
第22図	SK008・009実測図(1/40)	25
第23図	SK008・009出土遺物実測図(1/2、1/3)	26
第24図	SK011・012・013・014・016・017・018・020実測図(1/40)	27
第25図	SK010・011・012・013・014出土遺物実測図(1/1、1/3)	29
第26図	SK016・017・018出土遺物実測図(1/3)	31
第27図	SK021・022・023・026・028実測図(1/40)	32
第28図	SK020・021・022・023・026出土遺物実測図(1/3)	33
第29図	SK028出土遺物実測図(1/3)	35
第30図	SK029・030・034・036実測図(1/40)	36
第31図	SK029出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	37
第32図	SK029出土遺物実測図(2)(1/3)	38
第33図	SK030・034・036出土遺物実測図(1/3)	39
第34図	ビット・包含層・検出面出土遺物(1/1、1/3、1/4)	41
第35図	第13次調査区位置図(1/1,000)	43
第36図	第13次調査区遺構配置図(1/150)	44
第37図	SE33・34・38・39実測図(1/40)	45
第38図	SE24・38・32実測図(1/40)	46
第39図	SK04・07・12・19・25・29・31実測図(1/40)	47
第40図	SK01・07・09・26・27・36実測図(1/20、1/40)	48
第41図	SA01実測図(1/80)	49
第42図	SB01実測図(1/80)	50
第43図	出土遺物実測図(1/3)	52

## 図版目次

- |      |               |   |   |
|------|---------------|---|---|
| 図版 1 | 第11次調査        | (1)東側調査区全景(西から)                                   | (2)西側調査区全景(西から)                                       |
| 図版 2 | 第11次調査        | (1)西側下面全景(西から)                                    | (2)東側調査区北壁土層(南西から)                                    |
| 図版 3 | 第11次調査        | (1)SE002(南から)<br>(3)SE033(西から)<br>(5)SE037(西から)   | (2)SE002井筒(東から)<br>(4)SE033井筒(北から)<br>(6)SE037井筒(西から) |
| 図版 4 | 第11次調査        | (1)SE038(南から)<br>(3)SK003(西から)<br>(5)SK008土層(東から) | (2)SE038井筒(南から)<br>(4)SK005(南から)<br>(6)SK009土層(南から)   |
| 図版 5 | 第11次調査        | (1)SK010(北から)<br>(3)SK029(東から)<br>(5)SK029(東から)   | (2)SK028(北から)<br>(4)SK029土層(北から)<br>(6)SK034(南から)     |
| 図版 6 | 第11次調査出土遺物(1) |   |   |
| 図版 7 | 第11次調査出土遺物(2) |   |   |
| 図版 8 | 第11次調査出土遺物(3) |   |   |
| 図版 9 | 第13次調査        | (1)西側調査区全景(東から)                                   | (2)東側調査区全景(東から)                                       |
| 図版10 | 第13次調査        | (1)SE32井戸(南から)<br>(3)SE24井戸(南から)                  | (2)SE32・38・39井戸(南から)<br>(4)SE24井戸枠(南から)               |
| 図版11 | 第13次調査        | (1)SE33・34井戸(北から)<br>(3)SK29土壌(南から)               | (2)SE39井戸枠(南東から)<br>(4)SK36土壌(南から)                    |
| 図版12 | 第13次調査        | (1)SA01柱穴①(南から)<br>(3)SA01柱穴②土層(南から)<br>(5)出土遺物   | (2)SA01柱穴②(南から)<br>(4)SA01柱穴③(南から)                    |

## 表 目 次

第1表	箱崎遺跡調査一覧表	2
第2表	第13次調査遺構一覧表	53
第3表	第13次調査出土土師器計測表	54

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

### 1) 第11次調査

1997(平成9)年3月10日、山田國正氏より本市教育委員会に東区箱崎3丁目3264-3外(面積:745.7㎡)における病院新築工事に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから1997年3月11日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。その後、両者で協議を行った結果、建物建築部分の562㎡を対象として同年4月30日より発掘調査を実施することとなった。

### 2) 第13次調査

1997(平成9)年9月2日、株式会社西日本総合リースより本市教育委員会に東区馬出5丁目520番・521番(面積:471.37㎡)における店舗新築工事に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから1997年9月9日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。その後、両者で協議を行った結果、建物建築部分の297㎡を対象として同年10月27日より発掘調査を実施することとなった。

## 2. 調査の組織

### 1) 第11調査

調査委託:山田國正

調査主体:福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括:埋蔵文化財課長 荒巻輝勝(前任) 柳田純孝(現任)

同課第2係長 山口謙治(現 調査第2係長)

調査庶務:同課第1係 河野淳美(前任)

文化財整備課 谷口真由美(現任)

事前審査:同課主任文化財主事 松村道博(前任) 同課事前審査係長 田中壽夫(現任)

同課第2係 池田祐司(前任) 同課事前審査係 岸山洋(現任)

調査担当:同課第2係 榎本義嗣(現 調査第2係)

整理作業:北山めぐみ 西島信枝 松尾真澄

### 2) 第13調査

調査委託:株式会社西日本総合リース

調査主体:福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括:埋蔵文化財課長 荒巻輝勝(前任) 柳田純孝(現任)

同課第2係長 山口謙治(現 調査第2係長)

調査庶務:同課第1係 河野淳美(前任)

文化財整備課 谷口真由美(現任)

事前審査:同課主任文化財主事 松村道博(前任) 同課事前審査係長 田中壽夫(現任)

同課第2係 岸山洋(現 課事前審査係)

調査担当:同課第2係 佐藤一郎(現 調査第2係)

整理作業:相川和子 田中ヤス子 藤野邦子 藤村佳公恵

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで山田國正氏、株式会社西日本総合リースをはじめとして多数の関係者の皆様には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して謝意を表します。

## II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は今回報告する東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至る。この古砂丘の形成時期については少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘微高地には、第1図に示した範囲で、北側から箱崎遺跡、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が知られている。

本報告の箱崎遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に画される。この東側にはかつて「筥崎ノ津」と呼ばれた入り江が博多湾から湾入しており、後述する筥崎宮の私港として利用されていた。本遺跡の調査は第1表・第2図に示す様に10敷次を数える程度で、遺跡内の微地形は判然としなが、その立地から南北方向の尾根と東西の砂丘緩斜面で構成されるものと考えられる。遺跡北端部で実施された第10次調査では東西方向に尾根線を分断しており、調査区のはば中央に標高2.8mのピークが確認されている。この北端部の尾根線の南側延伸部分は現在のところ不明である。旧地形の解明は今後の調査の課題の一つといえよう。

本遺跡の発展の契機として看過できない歴史的事象に筥崎宮の創建がある。延喜21年(921)、大宰府観音寺巫女に八幡大菩薩の託宣があり、延長元年(923)に穂波郡大分宮を遷座、創建したと伝えられる。これは新羅来寇を防ぎ、対外貿易の拠点としての発展を祈念したものと考えられる。その後保延6年(1140)には香椎宮とともに大宰府の府領となる。仁平元年(1151)には大宰府検非違所の官人が軍兵を率いて博多とともに宋人追捕をおこなった際に筥崎宮に乱入している。また、文永11年(1274)の元寇の際に筥崎宮は焼失している。なお、再度の復興に備え、建治2年(1276)には薩摩国によって元寇防壁が箱崎地区の海岸線に築かれる。また、これまでの発掘調査では筥崎宮創建当時の遺構は確認されておらず、第2次調査での10世紀後半の溝が最も近時期のものといえる程度で、これからの調査に期するところが大きい。ただし、遺構、出土遺物ともに11世紀後半から増加するが、第1表に示した遺構時期から看取されるように各調査地点内での継続時期は比較的短い。今後の調査によって遺跡内での期的な集落占拠が明確にされよう。

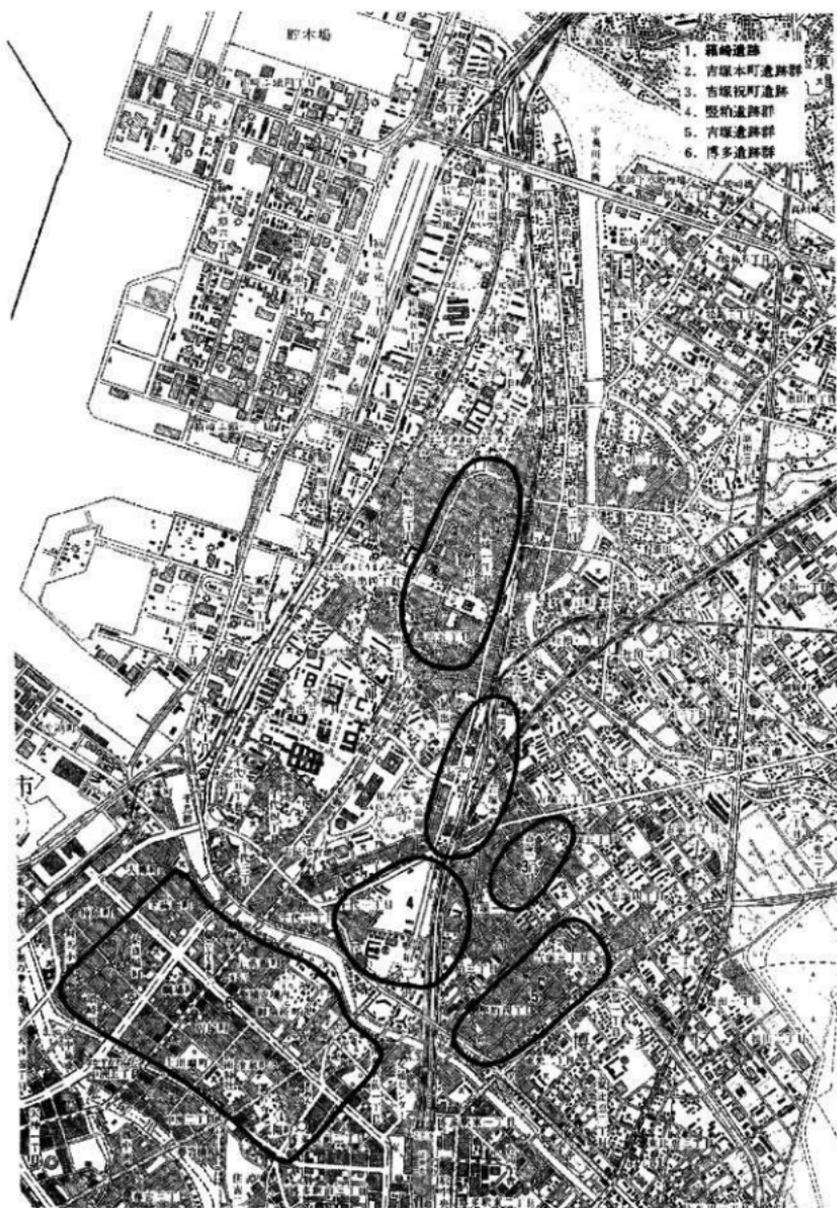
### <参考文献>

小林 茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』(九州大学出版会)1998年

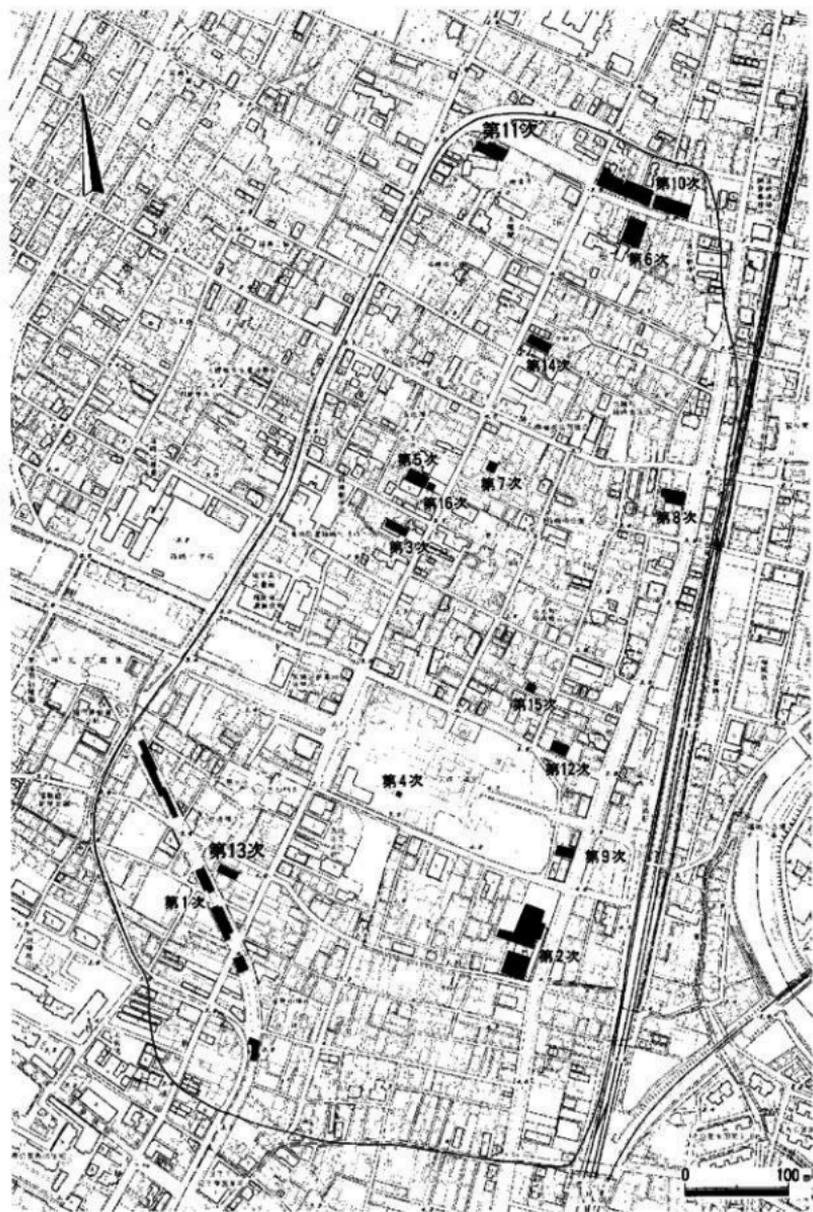
川添 昭二編『よみがえる中世1 東アジアの国際都市 博多』(平凡社)1988年

調査敷次	所在地(全て東区)	調査年度	主な遺構の時期	報文
第1次	馬出5丁目地内	1983	12世紀後半～15世紀	市報第193集(1988)
第2次	箱崎1丁目18-32外	1986	10世紀後半～15世紀	県報第79集(1987)
第3次	箱崎1丁目2731-1・4	1989	11世紀後半～15世紀	市報第262集(1991)
第4次	箱崎1丁目2761	1989	11世紀	市年報 Vol.4(1991)
第5次	箱崎1丁目25・27	1991	11世紀～15世紀	市報第273集(1992)
第6次	箱崎3丁目8-31	1994	12世紀後半～15世紀	市報第469集(1996)
第7次	箱崎1丁目2711外	1994	12世紀前半～13世紀	市報第469集(1996)
第8次	箱崎1丁目2549-1外	1996	古墳時代前期、12世紀中頃～13世紀	市報第591集(1999)
第9次	箱崎1丁目1935-1	1996	11世紀～13世紀	市報第550集(1998)
第10次	箱崎3丁目地内	1996	12世紀前半～13世紀	市報第551集(1998)
第11次	箱崎3丁目3266-1外	1997	12世紀後半～13世紀	本報告
第12次	箱崎1丁目2606-3-1	1997	11世紀～13世紀	整理中
第13次	馬出5丁目520・521	1997	15世紀	本報告
第14次	箱崎1丁目28-15	1998	12世紀～15世紀	整理中
第15次	箱崎1丁目2615	1998	11世紀後半～13世紀	整理中
第16次	箱崎1丁目2725	1998	11世紀～15世紀	整理中

第1表 箱崎遺跡調査一覧表



第1図 箱崎遺跡位置図(1/25,000)



第2図 箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000)

### Ⅲ. 第11次調査の記録

#### 1. 調査概要

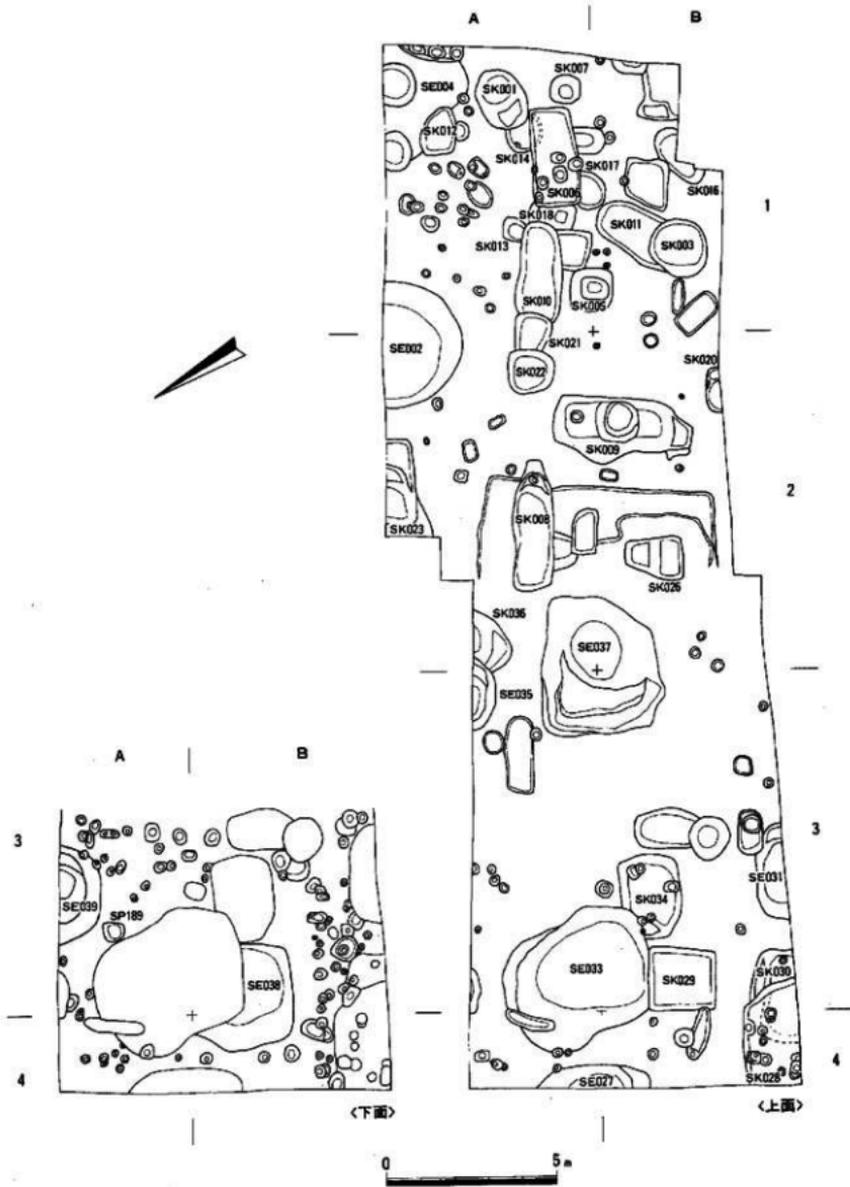
第11次調査区は東区箱崎3丁目3266-1外に所在し、調査前の現況はアスファルト舗装された平地で、バス折り返し場として利用されていた。箱崎跡の立地する砂丘上の北西端に位置している。

第5図はアスファルト除去後の調査区北壁土層を記録したもので、砂丘基盤層の黄褐色砂は西側海浜部方向に緩く傾斜する。その標高は東側で2.6m、西側で2.2mを測る。基本層序としてはその黄褐色砂層の上層には12世紀後半～13世紀の遺物を包含する21・22の2層が堆積する。1区西側から暗褐色砂質土(22層)が、2区西側からは更に上層に茶味がかった暗黄褐色土(21層)が堆積する。更に上層には7・18・12・17層等の水平堆積層がのる。土層観察では遺構の掘り込み面は数面にわたることが判明したが、今回の調査では2面の調査を実施した。まず、上面は西半部に認められた21層の中位から東側22層上面および東端部砂層上面にいたる標高約2.6～2.8mに設定した。3区西側以西では、21層下から掘り込まれる遺構を調査中に確認したため、基盤の砂層面で下面の調査を実施している。今回の調査で確認できた遺構は12世紀後半～14世紀の井戸、土坑、ピットで、13世紀代が大半を占める。なお、下面遺構としては2基の井戸(SE038・039)、ピットを確認した。

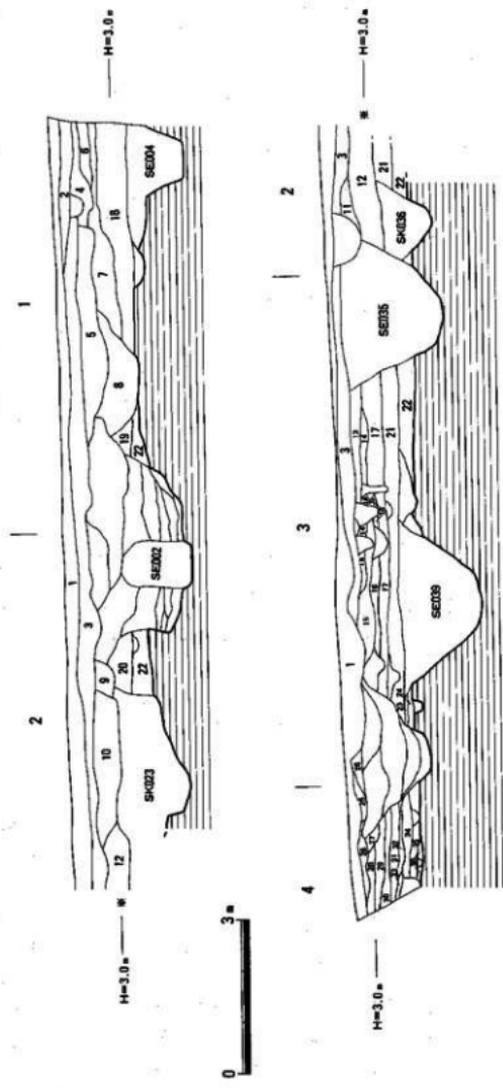
調査は平成9年4月30日、重機による表土剥ぎ取りから開始した。廃土処理を申請地内で行わざるを得なかったため、まず、東半部の調査を行い、その終了後の5月30日に重機によって廃土を反転し、西側上面の調査を実施した。また、上面終了後の6月18日からは人力によって包含層を砂層面まで下げて、下面の調査を実施した。6月26日に埋め戻し後、翌日に器材を撤収し、調査を完了した。申請面積745.7㎡のうち、建物面積562㎡を調査対象としたが、周囲の安全対策や法面確保のため、実際の調査面積は385㎡である。なお、調査時の遺構番号は3桁の通し番号とし、001から遺構の種類に関ら



第3図 第11次調査区位置図(1/1,000)



第4図 第11次調査区遺構配置図(1/150)



- 2. 土層**
- 1 黄1(バツク)
  - 2 黄2(土管)
  - 3 黄3(砂質土)
  - 4 黄4(土)
  - 5 黄5(砂質土)
  - 6 黄6(砂質土)
  - 7 黄7(砂質土)
  - 8 黄8(砂質土)
  - 9 黄9(砂質土)
  - 10 黄10(砂質土)
  - 11 黄11(砂質土)
  - 12 黄12(砂質土)
  - 13 黄13(砂質土)
  - 14 黄14(砂質土)
  - 15 黄15(砂質土)
  - 16 黄16(砂質土)
  - 17 黄17(砂質土)
  - 18 黄18(砂質土)
  - 19 黄19(砂質土)
  - 20 黄20(砂質土)
  - 21 黄21(砂質土)
  - 22 黄22(砂質土)
  - 23 黄23(砂質土)
  - 24 黄24(砂質土)
  - 25 黄25(砂質土)
  - 26 黄26(砂質土)
  - 27 黄27(砂質土)
  - 28 黄28(砂質土)
  - 29 黄29(砂質土)
  - 30 黄30(砂質土)
  - 31 黄31(砂質土)
  - 32 黄32(砂質土)
  - 33 黄33(砂質土)
  - 34 黄34(砂質土)
  - 35 黄35(砂質土)
  - 36 黄36(砂質土)

第5図 第11次調査区北嶽土層実測図(1/100)

ず付している。番号に欠番はあるものの、重複はない。以下の報告にあたっては原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号を組み合わせて記述する。また、本文中では遺構の位置を記す際に、調査時の座標軸を基準とした10m単位のグリッド(第4図参照)を用いる。

## 2. 遺構と遺物

### 1) 井戸

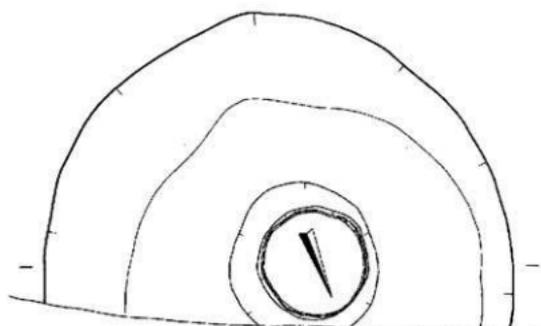
今回井戸として報告する遺構は9基であるが、調査区壁面にかかるものが大半で、規模や構造等の全容が判明する井戸は少ない。前述したように、SE038・039を除いては上面で確認した。

SE002(第6図) A-1・2区で検出したが、掘り方の北半部は調査区外に位置している。検出面での径は3.7mを測る。北壁土層(第6図)の観察では遺構掘り込み面は標高約3.5mにある。検出面からの深さ約1.2mに平坦面をつくり、径1.2m、深さ1.0mの円形坑を掘り下げた後に、井筒として幅10cm前後の板材を用いた径80cmの木桶を据えているが、高さ40cmが遺存するにとどまる。土層では井筒の痕跡を検出面付近から観察し得た。井筒の最下面の標高は0.4mを測る。

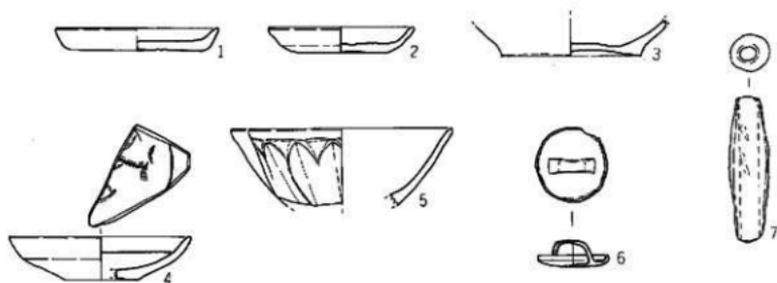
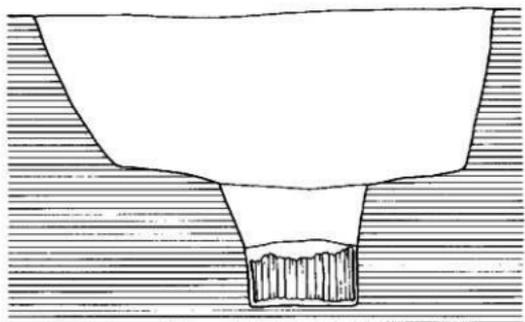
出土遺物(第6図1~7) 1・2は土師器の小皿である。順に口径は9.4、8.4cm、器高は1.3、1.5cmを測る。3は土師器の環である。全て外底部は回転糸切りで、1には板状圧痕が認められる。4は白磁皿で、見込みに片彫りの草花文を施す。外底部の軸は削り取る。5は外面に饒速弁文を有する龍泉窯系青磁碗で、釉色はにぶい緑色を呈する。6は径2.8cmを測る釘状の青銅製飾り金具である。7は管状土鉢で、重量は10.06gである。1のみ井筒内からの出土である。出土遺物から13世紀前半から中頃の井戸と考えられる。

SE004(第7図) A-1区に位置し、SK012に切られる。調査区北東隅に位置するため、平面プランは不明である。検出面の黄褐色砂層から深さ0.4mを掘り下げ後、更に井筒を据える円形の坑を0.7m掘削している。ただし、木桶等は遺存していない。

出土遺物(第8図・第9図) 8~14は土師器で、8・9は小皿、他は環である。いずれも外底部は回転糸切りで、8・11・14を除いて板状圧痕を有する。小皿の口径は順に、8.4、9.6cm、環の口径は11.3~15.2cmとばらつきが大きい。15・16は常滑焼の甕である。16の口縁緑帯帯幅は2.8cmを測る。17~19は中国陶器である。17は口縁部を内側に屈曲させる甕で、復元口径は47.2cmを測る。にぶい赤褐色を呈する胎上に灰オリーブ色の釉が施される。体部内面には青海波状の当て具痕が残る。18は玉縁状の口縁を呈する黄釉の盤で、内面には化粧土がみられ、鉄彩を施す。口縁部内面の軸は拭き取られる。また、体部外面下半も露胎となる。19は壺の底部で、灰オリーブ色の釉が施されるが、畳付きおよびその内部は露胎である。20~25は白磁である。20・21は壺もしくは水注であろう。21は高台から外底部にかけては露胎となる。22~25は皿である。22は見込みに草花文をへうで描く。外底部は露胎で、全体に貫入が多い。23~25は口禿のものである。いずれも全面施釉後に外底部の釉を拭き取る。23は器高4.2cmと深みのある器形である。26~33は龍泉窯系の青磁である。26はいわゆるⅢ類の小腕で、口縁部は外反させる。畳付きを除き厚い釉が施される。内面には叉状の工具により文様を施す。28はⅠ類の碗で、圏線を有する見込みに細い片彫りの花文を施す。畳付きおよびその内部は露胎である。27、29~33は外面に饒速弁を有するもので、27・29・33はⅠ類に属する。27・29は碗で、27は圏線を有する見込みに印花を施す。33は小腕で、復元口径は9.6cmを測る。体部の上位で屈曲し、端部は鈍く外反する。器内の厚い底部で、畳付きおよび外底部は露胎である。30~32はⅢ類である。30は碗で、細い先尖りの高台を有する。31はやや小振りな小腕で、露胎となる畳付きは赤褐色に発色する。32はⅢ-1類の環で、釉色は青味がかった淡緑色を呈する。見込みに双魚文を貼付する。畳付きは31同様に赤褐色を呈する。34~36は青白磁である。34は口禿の皿で、内面に印文を有する。細片からの復

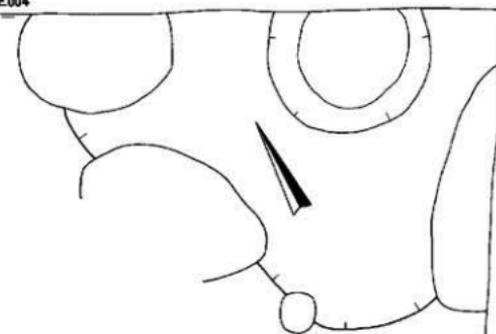


H=3.8cm

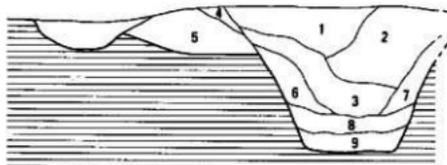


第6図 SE002実測図(1/40)および出土遺物実測図(6・7は1/2、他は1/3)

SE004



H=2.9m



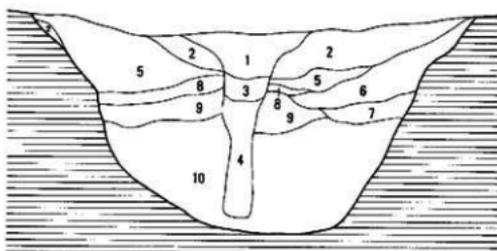
SE004

- 1 暗褐色砂質土
- 2 暗褐色砂質土(やや砂質)
- 3 土よりやや砂質
- 4 灰褐色土
- 5 灰褐色土(やや砂質、黄褐色砂質土ブロック含む)
- 6 暗褐色砂質土
- 7 暗褐色砂質土
- 8 灰褐色土(黄褐色砂質土層に属し6)
- 9 暗褐色砂質土(黄褐色砂質土層に属し5)

SE027



H=2.9m

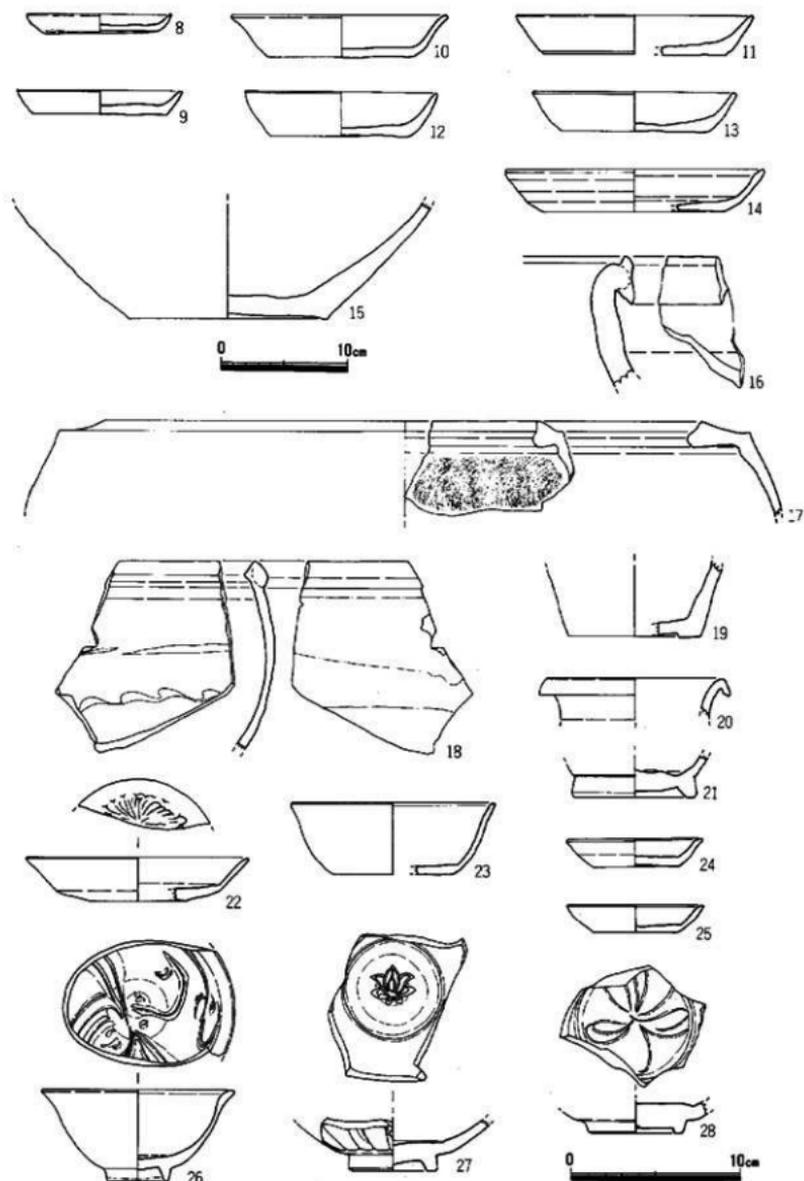


SE027

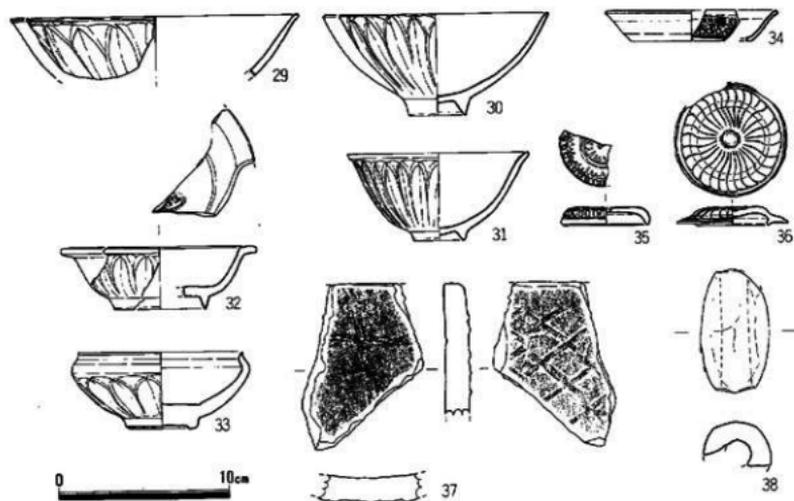
- 1 赤褐色土(硬土、炭化物片含む)
- 2 暗褐色土(灰褐色砂質土含む)
- 3 暗褐色土(黄褐色砂、炭化物片含む)
- 4 暗褐色土、暗褐色砂の互層
- 5 暗褐色砂質土(硬土、炭化物片多量含む)
- 6 暗褐色砂質土(黄褐色砂質土ブロック含む)
- 7 暗褐色砂質土、暗褐色砂質土の互層
- 8 暗褐色砂質土(黄褐色砂質土、炭化物片含む)
- 9 暗褐色砂質土
- 10 暗褐色砂



第7図 SE004・027実測図(1/40)



第8図 SE004出土遺物実測図(1)(15・17は1/4、他は1/3)



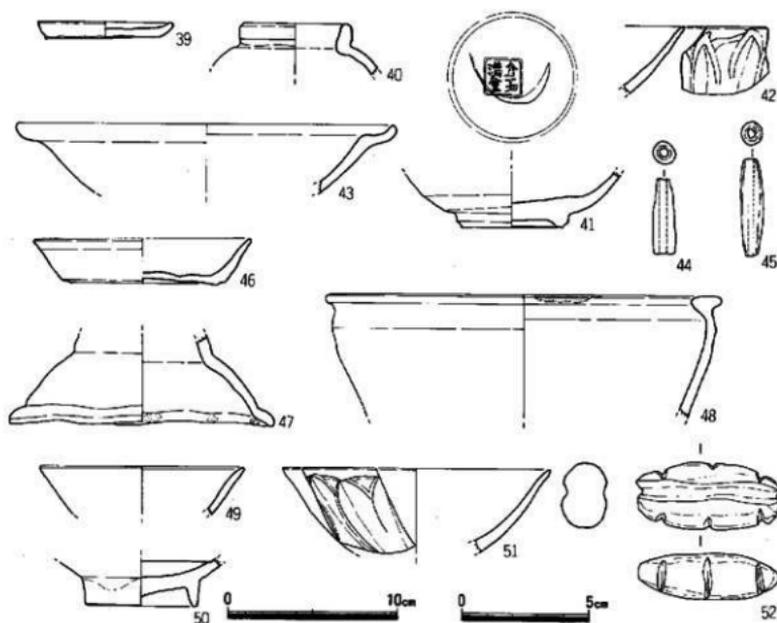
第9図 SE004出土遺物実測図②(1/3)

元である。35・36は合子蓋である。35は淡茶緑色の釉が外面に施釉される。外面には型取りによる施文がある。36は扁平な器形で、外面には型押し陽刻の放射線状の施文を有する。釉色は灰白色で、内面には施釉されない。37は平瓦で端部が遺存する。凹面は布目が残り、端部付近には横骨の結束痕が観察できる。凸面の端部にも布目が認められるが、格子目の叩きを施している。38は最大径4.0cmを測る大形の管状土鉢である。これらの出土遺物から13世紀の後半の井戸と考えられる。

SE027(第7図) 調査区西端のA・B-4区で確認したが、遺構の大半が調査区外に位置する。深さ1.6mを測る。土層観察から1・3・4層は井筒部分と推定されることから井戸とした。調査区壁面部分でのこの土層は井筒の端部を縦断しているものと考えられる。井筒部分の下層では木質の腐食した痕跡が認められた。木桶を据えていたものと推測される。

出土遺物(第10図39~45) 39は土師器で径7.8cm、器高1.0cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。40は中国陶器の瓶で、黒灰色の胎上に褐色の釉を施す。41~43は龍泉窯系青磁である。41・42は碗で、41の見込みは團線を施し、「金玉滿堂」の印文を有する。また、印文を切る片彫りの弧文が加えられる。貫付きおよびその内部は露胎である。42は外面に饅頭弁を施す。淡オリブ灰色の釉が施釉される。43は罎形口縁の甗で、端部は短く立ち上がる。細片からの復元口径は22.0cmである。釉色は淡オリブ色である。44・45は小形の管状土鉢である。45はほぼ完形で、重量2.35gを測る。出土遺物から13世紀の後半から14世紀初頭の井戸と考えられる。

SE031(第11図) B-3区に位置する。覆土が灰褐色砂質土と黄褐色砂の互層を呈しており、井戸の掘り方であると判断した。南半部は調査区外に位置している。検出面からの深さは1.2mで、東側壁面には平坦面を有する。調査区内では井筒と考えられる痕跡は確認できなかった。出土遺物には土師器小皿・坏、須恵質上器、中国陶器、同安窯系および龍泉窯系(Ⅰ・Ⅲ類)の青磁等のが少量あるが、



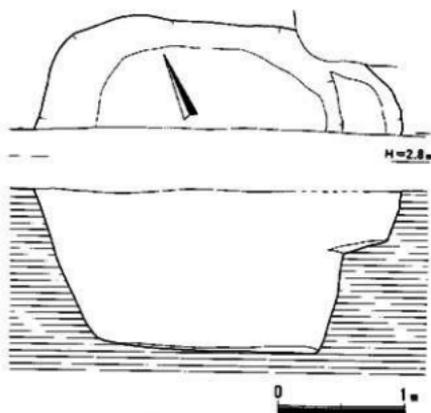
第10図 SE027・033出土遺物実測図(44・45・52は1/2、他は1/3)

細片により図化していない。13世紀後半の所産であろう。

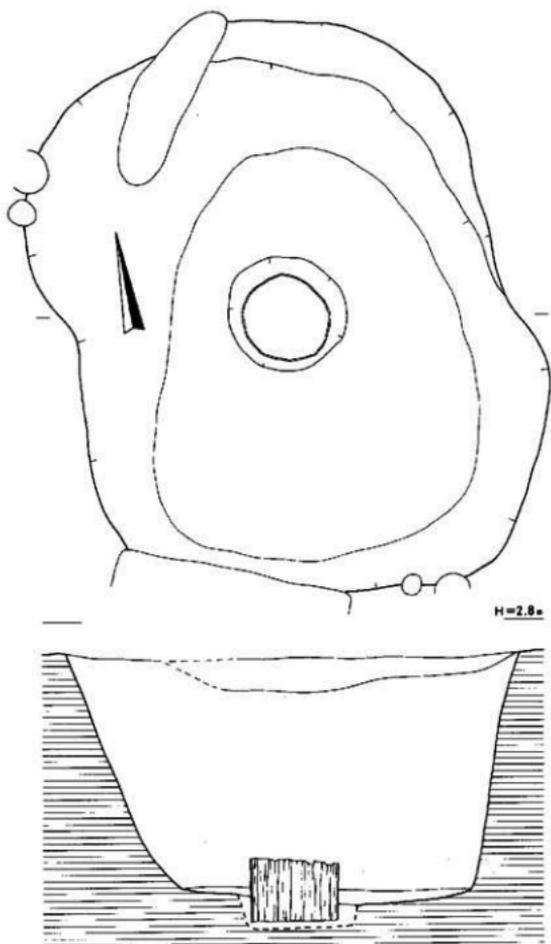
SE033(第12図) A・B-3・4区で検出した不整楕円形を呈する井戸で、長径4.4m、短径3.5mを測る。SK029に切られ、SK034を切る。検出面より深さ1.9mに平坦面をつくり、その中央北寄りに井筒を据える径0.9m、推定で深さ0.2m程度の円形坑を掘り込んでいる。そこに幅8~12cm、厚さ1cmの板材を22枚組み合わせた径70cmの木桶を置く。高さ50cm程度が比較的良好に遺存する。この木桶中には拳大からやや大振りな礫が投棄されていた。井筒の内下面の標高は0.4mを測る。

出土遺物(第10図46~52)

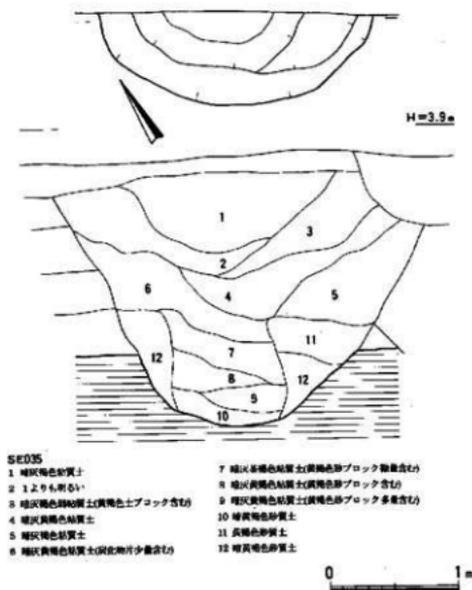
46は土師器環で、口径12.6cm、



第11図 SE031実測図(1/40)



第12图 SE033实测图(1/40)



第13図 SE035実測図(1/40)

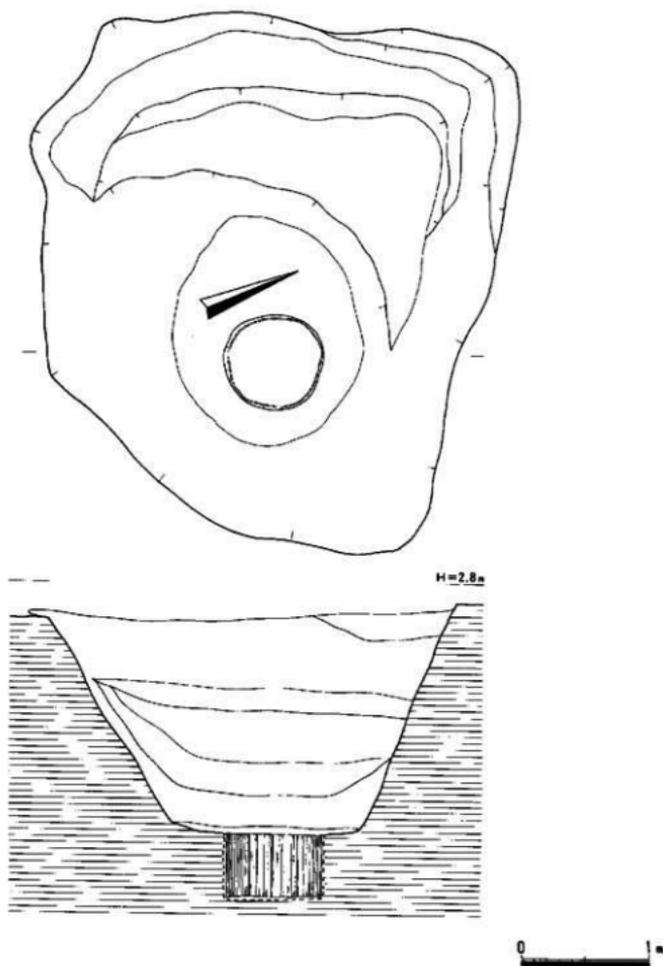
オリブ黄である。52は滑石製の有溝石鐮で、両側面にも3本づつの抉りをいれる。重量は41.51gを測る。出土遺物から13世紀の中頃の井戸であろう。

SE035(第13図) A-3区の調査区壁面際に位置し、SK036を切る。遺構の北半部は調査区外に延びる。北壁土層(第6図)の観察では実際の遺構掘り込み面SE002と同一面であると考えられる。その標高約3.5mにある。7~10層は井筒の痕跡と考えられ、径80cm程度の木桶等の存在が看取されるが、木質の遺存はなかった。出土遺物には上師器皿、中国陶器、高麗象眼青磁等があるが、いずれも細片である。14世紀の井戸であろう。

SE037(第14図) A・B-2・3区で確認した。径3.4~4.1mの不整形な掘り方を早する井戸である。掘り方の西側には狭い数段の平坦面を有し、径1.5~1.8mを測る下端面に至る。検出面からの深さは約1.7mである。そのやや東寄りに径0.9m、深さ推定で0.5mの円形の坑を掘り込み、比較的薄手で幅5~8cmの狭い板材を組んだ径70cmの木桶を井筒として据えている。高さ50cm程度が遺存する。覆土上層は灰茶褐色砂質土に黄褐色砂質土が混じり、下層は暗褐色砂質土と黄褐色砂の互層となる。下層の上面付近では井筒と考えられるやや粘性のある暗灰色砂質土の円形プランを確認できた。井筒の最下層では湧水する。その標高は0.35mを測る。

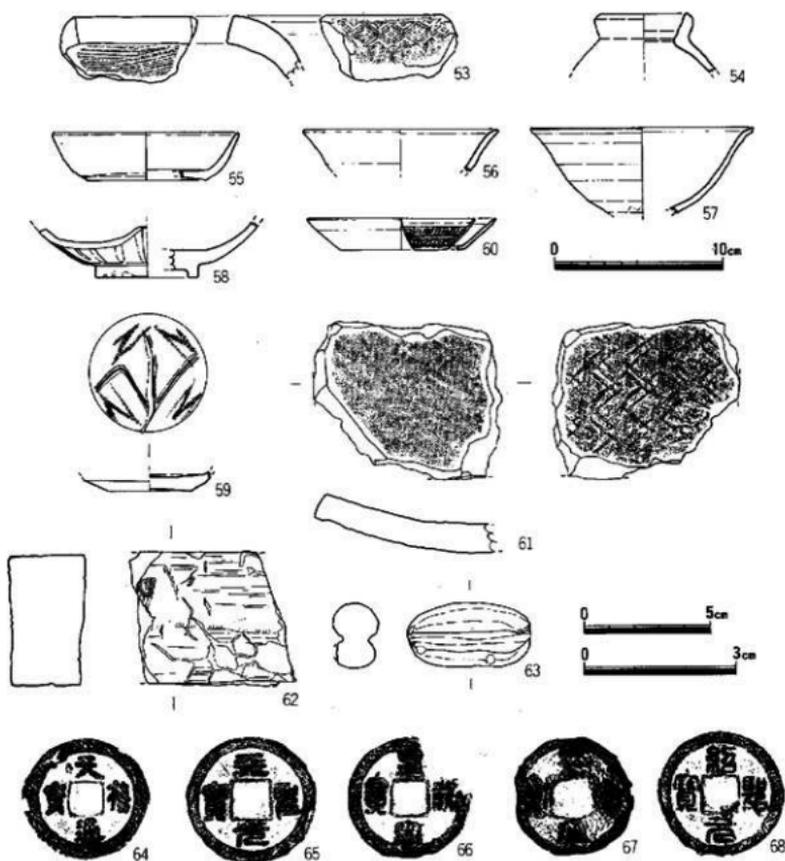
出土遺物(第15図) 53は瓦質土器火舎の口縁部片である。外面口縁部下には菱形の印文が施される。内面は横方向の刷毛目を加える。54は中国陶器の瓶で暗オリブ色釉が内外面に施釉される。復元口径は5.0cmを測る。55~57はいずれも口壳の白磁である。55・56は皿で、55は外面体部下半から底部に

器高2.7cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。内底部までヨコナデが及ぶ。47・48は中国陶器である。47は蓋で、褐釉が内外面に施釉される。胎土は暗灰色を呈する。口縁部内面には目跡が残る。焼き歪みが著しい。48体部の上位で緩く内湾し、「T」字状の口縁部を有する鉢である。口唇部外面および内面にはオリブ灰色の釉が施される。露胎となる口縁部上面には化粧土が認められ、目跡が残る。復元口径は21.8cmである。49・50は白磁である。49は口壳の白磁皿で、やや青味のある白色釉が施釉される。50はV型の碗で、高台の上平まで軸垂れする。見込みには沈線を有する。51は外面に鎊蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗である。釉色は



第14図 SE037実測図(1/40)

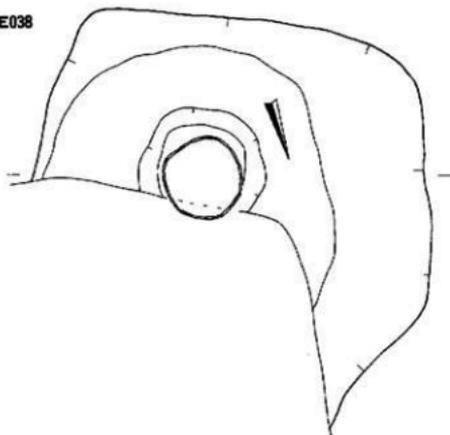
は施釉されない。また、見込みも露胎で、一部に釉の付着が認められる。56は口縁部を緩く外反させ、全面に施釉がなされる。57は碗で、口縁部は外反する。図上での下端部は露胎となる。58は龍泉窯系青磁碗である。外面には蓮弁と考えられる片彫りがみられる。灰色の緻密な胎土に灰オリブ色の釉が施される。59は同安窯系の青磁皿である。叉状および櫛状の工具による施文が見込みに施される。施釉後に外底部の釉はカキ取られる。60は青白磁の口禿の皿で、内面には印文を施す。SE004出土の



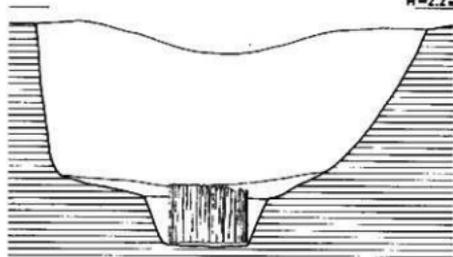
第15図 SE037出土遺物実測図(63は1/2、64~68は1/1、他は1/3)

皿(第9図34)と文様が酷似する。61は平瓦で、側面部が遺存する。凹面および側面に細かい布目を残す。凸面には二重格子の叩き目が施されるが、粗くナデを加えている。62は瓦質の埴で、断面方形を呈する。幅7.9cm、厚さ4.4cmを測る。63は滑石製の有溝石鐘で、紡錘形を呈する。重量は31.73gを測る。64~68は北宋代の銅銭である。64は「天禧通寶」(初鑄年:1017年)、65は「天聖元寶」(同:1023年)、66-67は「皇崇通寶」(同:1039年)、68は「紹聖元寶」(同:1094年)である。ただし、64は表裏面ともに縁幅に歪みが大きく、67は銭銘の鑄上りが不良で、孔の形状も不整であることから模鑄銭の可能性を有する。53・57・61は井筒から、他は掘り方覆土中から出土した。出土遺物から13世紀後半の井戸であると考えられる。

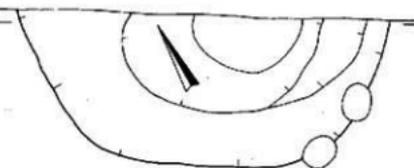
SE038



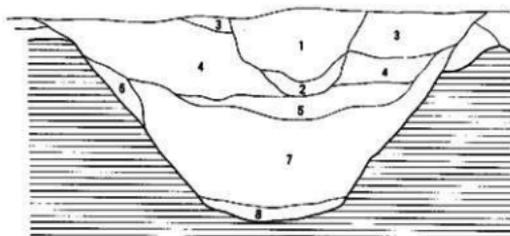
H=2.2m



SE039



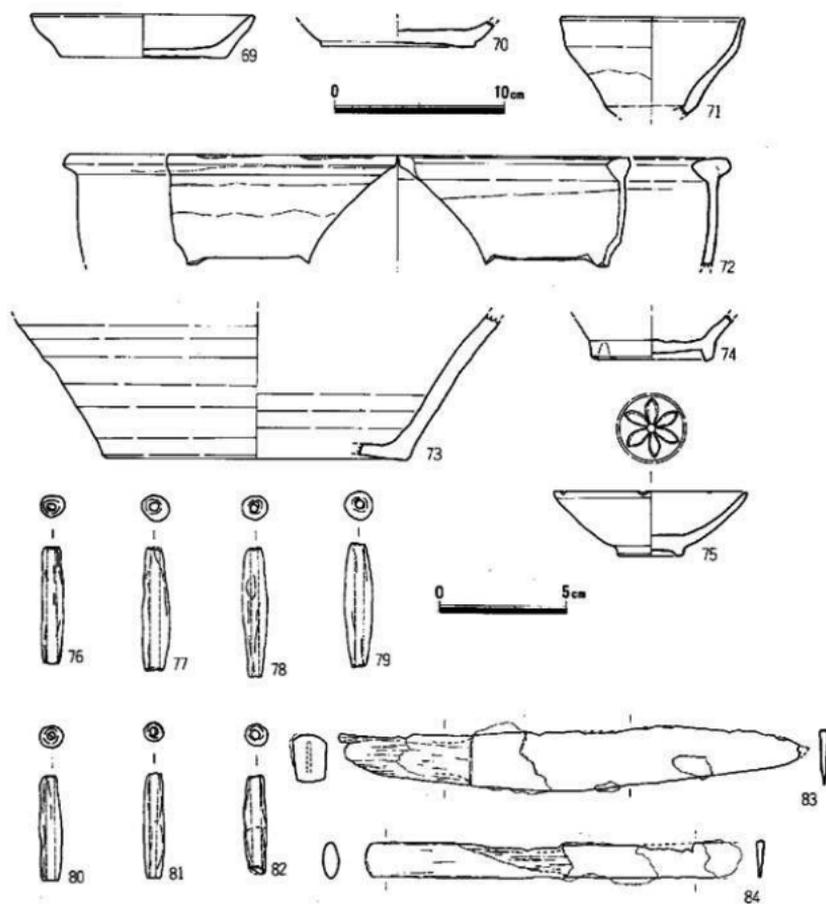
H=2.9m



SE039

- 1 赤褐色土(黄化物質、黄褐色ブロック含む)
- 2 赤褐色砂質土
- 3 赤褐色砂質土
- 4 赤褐色砂質土と暗黄褐色砂質土の互層
- 5 暗黄褐色砂質土
- 6 暗黄褐色砂質土
- 7 赤褐色砂質土(暗黄褐色砂ブロック含む)
- 8 暗黄褐色砂質土

第16図 SE038・039実測図(1/40)



第17図 SE038出土遺物実測図(76~82は1/2、他は1/3)

SE038(第16図) B-3・4区の下面で確認した。前述したように下面の調査は基盤の黄褐色砂層面を実施したが、掘り込み面はSE039同様にその上層にあると考えられ、不明瞭ながら平面プランを砂層上層で確認できた。遺構の北側は上面に位置するSE033に切られる。検出面では径3.3m程度を測り、不整な円形をなすと思われる。その検出面からの深さ1.3mに平坦面をつくりだす。東側壁面は西側に比して立ち上がり急である。その平坦面のやや南寄りに井筒を据える径約1.0m、深さ0.4mの円形の坑を掘削している。井筒として厚さ2~3cm、幅10~12cmの厚味のある板材を17枚組んだ木桶が据えられる。長さは約40cmが遺存していた。覆土の上層は灰褐色砂質土、下層は暗灰褐色

砂質土と暗黄褐色砂が互層となる。下層の上面付近では、井筒の痕跡と考えられる灰褐色粘質土が円形に確認できた。なお、井筒の最下面の標高は0.35mを測り、そのやや上位で湧水する。

出土遺物(第17図) 69・70は土師器坏である。共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。69は復元口径12.8cm、器高2.5cmを測る。71は黒釉磁器のいわゆる天目碗で、体部は大きく開く。内面および体部上半に施釉される。口縁端部および軸尻は茶褐色を呈する。暗灰色の胎土には白色の砂粒が混じる。72は中国陶器の鉢もしくは壺である。復元口径38.6cmを測る。体部内面には灰白色、口縁部には明褐色の釉が施されるが、体部外面は露胎である。口縁部上面には目跡が残る。73は常滑焼の鉢であろう。74は白磁の水注もしくは壺の底部である。釉は灰白色で、高台内は露胎である。75は龍泉窯系青磁の小碗で、口縁端部を僅かに欠失するものの、ほぼ完形である。口縁部には輪花を有し、見込みには印花が施される。淡緑色の釉が高台際まで施釉される。76～82は細身の管状土錘で、すべてほぼ完形である。平均重量は2.84gを測る。83は鉄製庖丁で、柄の木質が比較的良好に遺存する。現長27.1cm、刀身長19.8cm、身幅3.5cmを測る。84は鉄製刀子で、断面紡錘形の本柄が良好に遺存する。現長22.1cm、身幅2.1cmを測る。75～84は木桶中より一括出土したもので、井戸祭祀に関わる遺物であろう。これらの出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。

SE039(第16図) A-3区の下面で検出した。北半部は調査区外に位置している。北壁土層(第6図)の観察では遺構掘り込み面は21層下面にあるが、前述した様に実際の検出は黄褐色砂層で行った。遺構土層図の1・2層は壁面に一部かかった井筒の覆土と推定される。調査区内では木桶等は確認できていない。出土遺物には土師器小皿・坏、須恵質土器、中国陶器、滑石製品等があるがいずれも細片である。

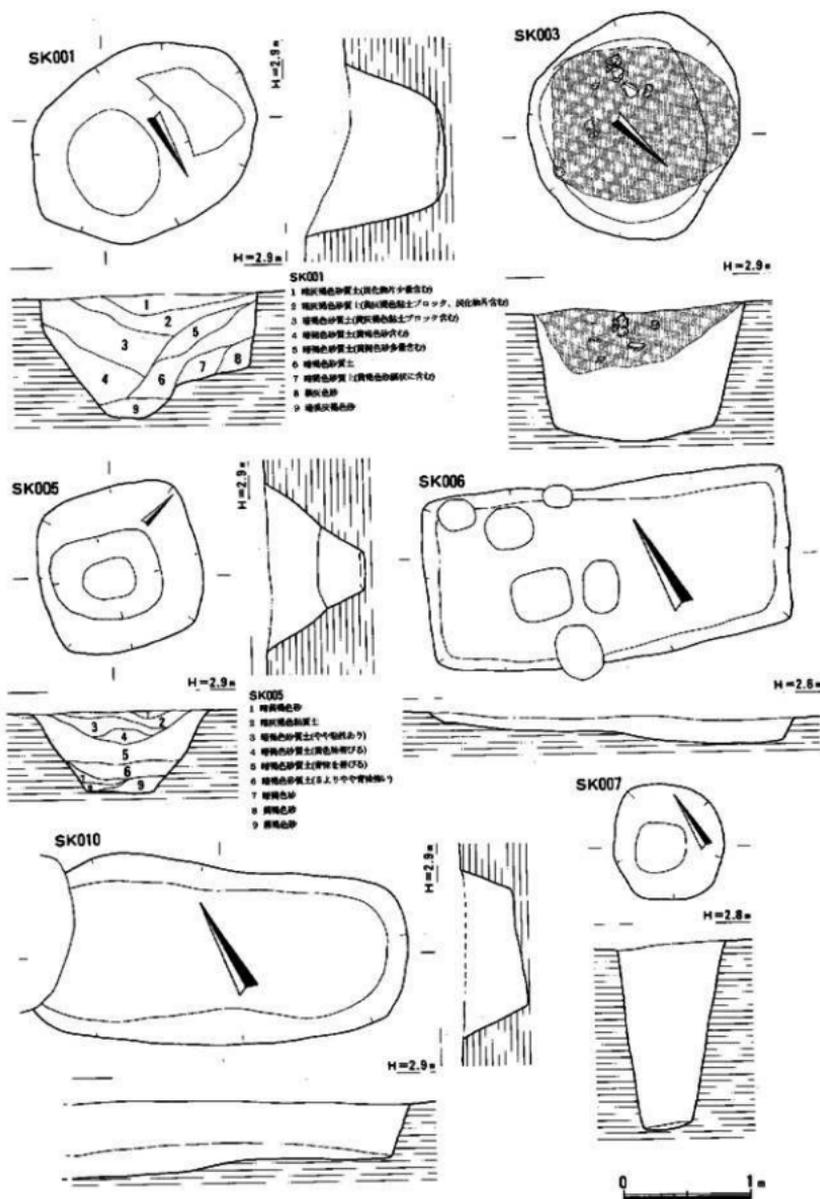
## 2) 土坑

SK001(第18図) A-1区で確認した楕円形の土坑で、SK014を切る。長径1.9m、短径1.4m、深さ1.0mを測り、西側には平坦面を有する。埋没当初は西側からの流れ込みが顕著である。

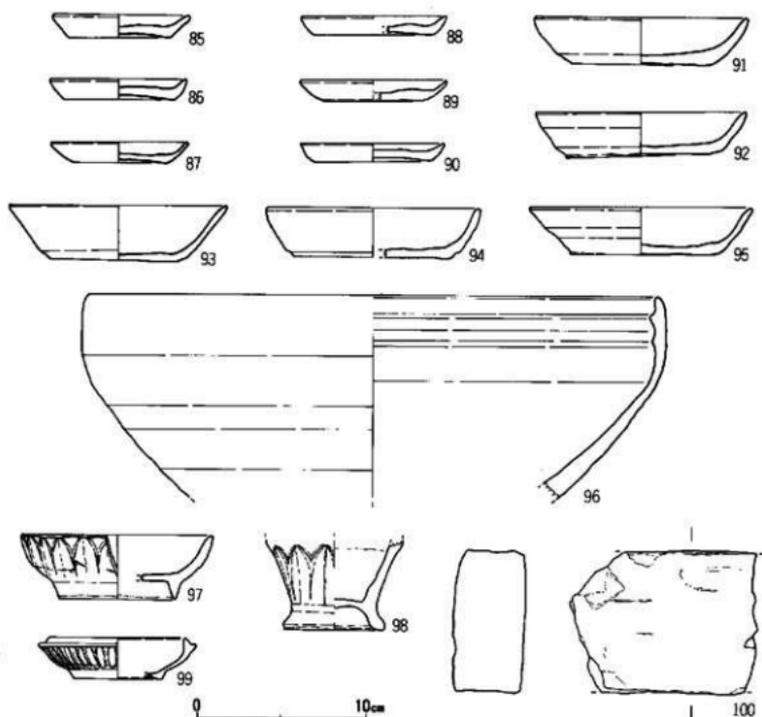
出土遺物(第19図) 85～90は土師器小皿である。89を除いて板状圧痕は認められない。口径は7.9～8.6cmで平均8.3cm、器高は1.1～1.3cmで平均1.2cmを測る。91～95は土師器坏で、93・94は板状圧痕を有する。口径12.2～12.8cmで平均12.5cm、器高は2.8～3.3cmで、平均は2.9cmである。96は中国陶器の鉢で、復元口径は33.4cmを測る。内面の口縁部下に2条の突帯が巡る。赤茶褐色の胎土には砂粒が多量に混じる。施釉はされない。97・98は龍泉窯系青磁である。97は外面に鎊蓮弁を有する皿類の坏である。貫入が内外面に入る。畳付きのみ露胎である。98は陽刻縁取りの鎊蓮弁を施す壺底部で、畳付きは露胎である。99は青白磁の合子身である。体部には型押しによる陽刻の施文を有する。体部下半以下および受部は露胎である。100は瓦質の埴で、幅8.5cm、厚さ4.2cmを測る。これらの出土遺物から13世紀後半の土坑と考えられる。

SK003(第18図) B-1区で検出したやや不整な円形の土坑で、SK011を切る。径1.65～1.8m、深さ1.05mを測る。壁面の立ち上がりは急で、底面は中央部がやや深くなる。上面から深さ約0.5mにかけてレンズ状に厚さ数cmの炭化物層(網掛け部)が認められた。その除去後は少量含む灰茶褐色砂質土となる。上面から炭化物層までを上層、底面までを下層として遺物を取り上げた。

出土遺物(第20図) 101～115は土師器小皿で、101～103は下層、その他は上層出土である。101のみに板状圧痕が認められる。口径は7.4～8.6cmで、平均は7.9cm、器高は1.2～1.5cm、平均は1.4cmを測る。116～132は土師器坏で、116～122は下層出土である。116・123・124を除いて板状圧痕はない。口径は11.2～12.8cmで、平均は12.0cm、器高は2.5～3.2cmで、平均は2.9cmである。内底部までヨコナデが及ぶ個体が約半数を占める。133は白磁皿皿類で、上層からの出土である。釉色はやや濁りの



第18図 SK001・003・005・006・007・010実測図(1/40)



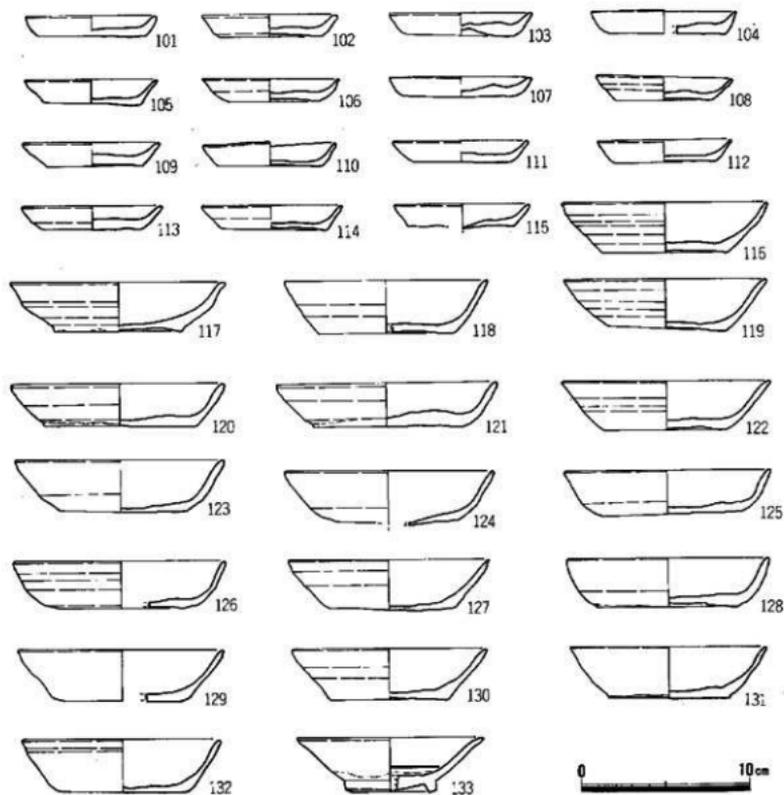
第19図 SK001出土遺物実測図(1/3)

ある白色で、体部下半は露胎となる。見込みの種は輪状にカキ取る。土師器の法量からこの土坑は13世紀末から14世紀初頭のものと考えられる。

SK005(第18図) A・B-1区に位置する。1辺1.25mの隅丸の正方形を呈する土坑で、断面は漏斗形をなし、狭い底面に至る。深さは0.75mである。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第21図134・135) 134は土師器小皿で、復元口径8.1cm、器高1.5cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。135は平瓦で、側面が遺存する。凹面および側縁部に細かい布目、凸面には二重格子の叩き目がみられる。なお、凹面に残る二重格子目は調整後に半乾きの段階で、同様の平瓦を重ねた結果、生じたものであろう。他に須恵質土器、白磁、青磁が出土しているが、いずれも細片である。山土遺物は少量であるが、土師器の法量から13世紀末から14世紀初頭の遺構と推定される。

SK006(第18図) A-1区で確認した。SK014・017・018を切る隅丸長方形の上坑で、長さ2.9m、幅1.4m、深さ0.15mを測る。西側の壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は東側に緩く傾斜する。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とする。

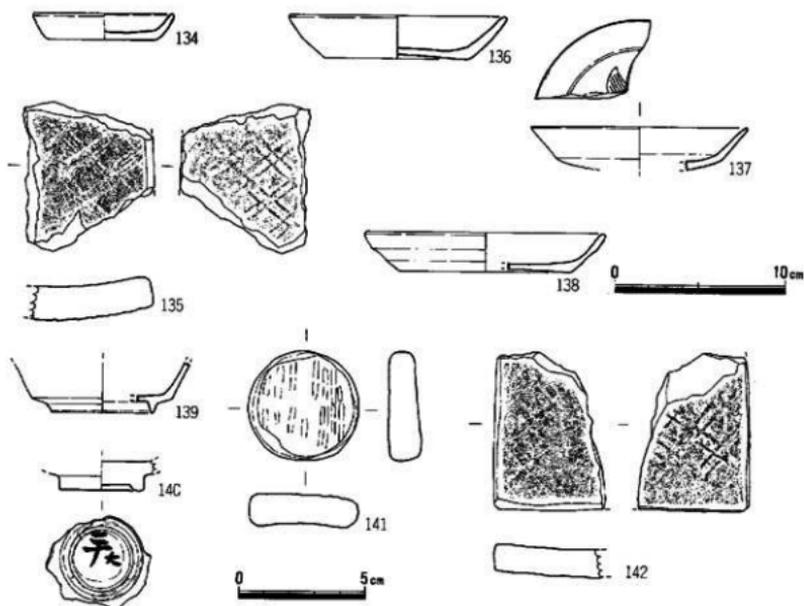


第20図 SK003出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第21図136・137) 136は土師器坏で、復元口径12.6cm、器高2.5cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。137は白磁皿のⅧ類である。体部内面の屈曲部に段を有する。見込みにはへら状工具により草花文が施される。他に土師器小皿、中国陶器、青磁等の細片が出土している。13世紀中頃の遺構であろう。

SK007(第18図) A-1区に位置する円形土坑で、径0.9m、深さ1.4mを測る。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第21図138~142) 138は土師器坏で、復元口径13.8cm、器高2.3cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。139・140は龍泉窯系青磁で、139はⅢ類の坏である。体部下半で屈曲する。明灰緑色の釉が豊付きを除き施釉される。140はⅠ類の碗で、外底部には墨書が記される。141は滑石製右鍋の再加丁品で、周縁を研磨する。径4.4cm、厚さ1.3cmを測る。142は平瓦である。端部と側面部が遺存する。凹面は布目、凸面は二重格子の叩き目が認められ、SK005の平瓦(135)同様

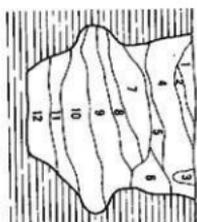


第21図 SK005・006・007出土遺物実測図(141は1/2、他は1/3)

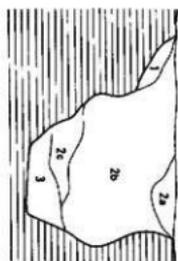
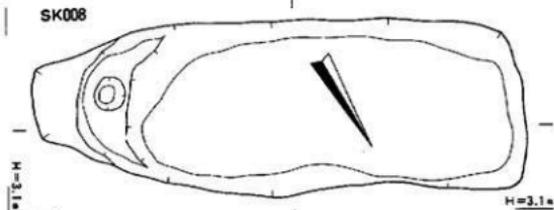
に凹面には格子目がみられる。13世紀中頃の遺構と考えられる。

SK008(第22図) A-2区で検出したやや不整な隅丸長方形の十坑である。長さ3.85m、幅1.3m、深さ1.3mを測る。東側には平坦面およびピットが認められ、底面はほぼ平坦である。深さ0.4m付近には炭化物片が混じる灰層(5層)が厚さ10cm前後堆積する。暗褐色砂質土層と基盤である黄褐色砂層の境界部分の下位では壁面がオーバーハングする。1~6層までを上層遺物、以下を下層遺物として取り上げたが、下層遺物は少量であった。

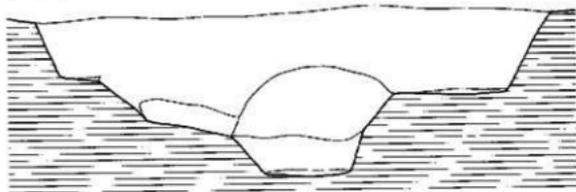
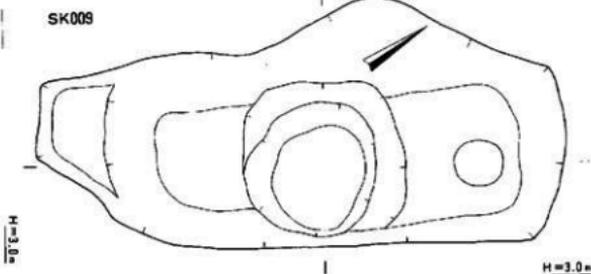
出土遺物(第23図143~153) いずれも上層遺物である。143~145は土師器小皿で、上層出土である。いずれも外底部は回転糸切りで、143のみ板状圧痕を有する。143は歪みが大きい。145は口径8.8cm、器高2.4cmで、口縁部内外面に煤の付着が認められる。146~148は土師器坏で、小皿同様に上層からの出土である。回転糸切り底で、148には板状圧痕がない。口径は順に11.3、12.6、12.3cm、器高は2.8、2.8、3.4cmである。149は中国陶器で、鐔形口縁の盤であろう。灰オリーブ色の釉が体部内面および口縁部内面に施される。露胎部分は暗赤褐色を呈する。150は同安窯系青磁で、外面に柿目文を施す。体部内面にも施文がある。遺存部分での外面は露胎である。外底部には墨書が記される。151は丸瓦で、側面が遺存する。凸面には二重格子の叩き目、内面には布目が認められる。側面はへら削りを加える。152は基石と考えられ、径1.7~1.9cm、厚さ0.8cmを測る。153は瓦質の埴で、端部が遺存する。幅7.6cm、厚さ4.0cmである。これらの出土遺物から13世紀後半から末の遺構と推定される。



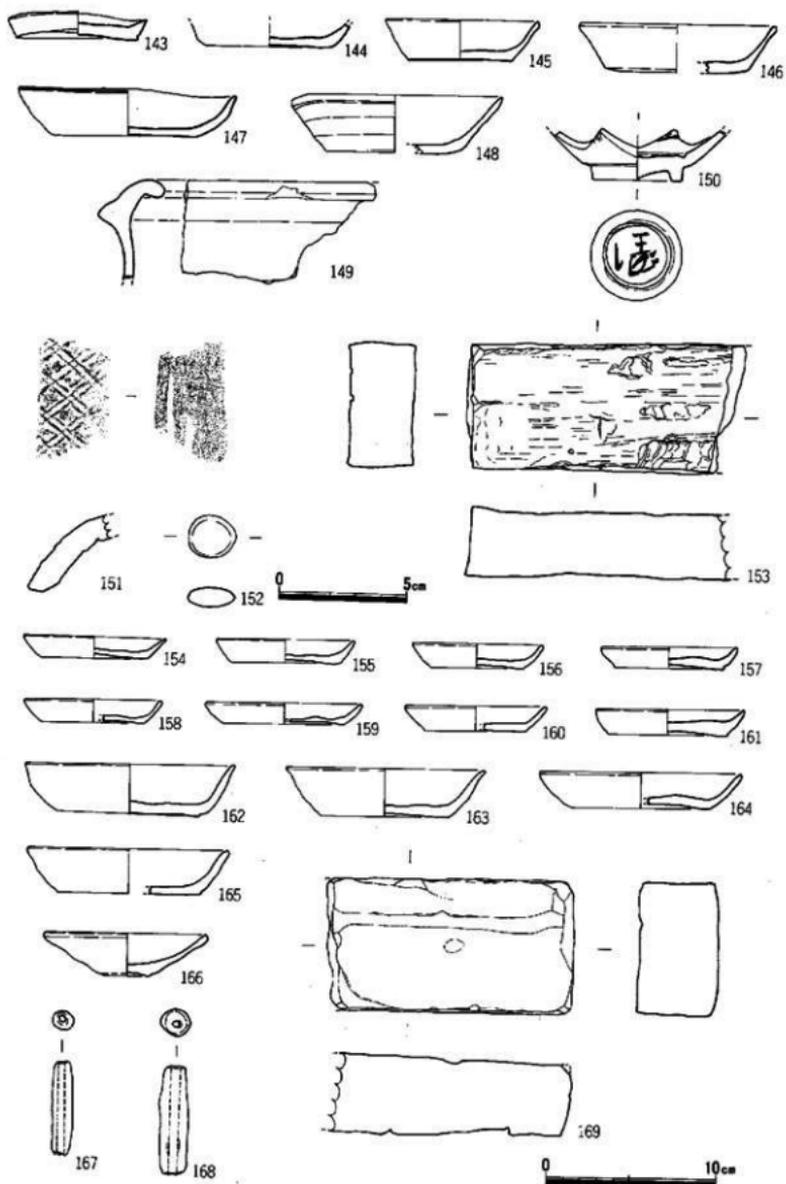
- SK008
- 1 碑石+
  - 2 碑石(碑石+土坑)
  - 3 碑石(碑石+土坑)
  - 4 碑石(碑石+土坑)
  - 5 碑石(碑石+土坑)
  - 6 碑石(碑石+土坑)
  - 7 碑石(碑石)
  - 8 碑石(碑石)
  - 9 碑石(碑石)
  - 10 碑石(碑石)
  - 11 碑石(碑石)
  - 12 碑石(碑石)



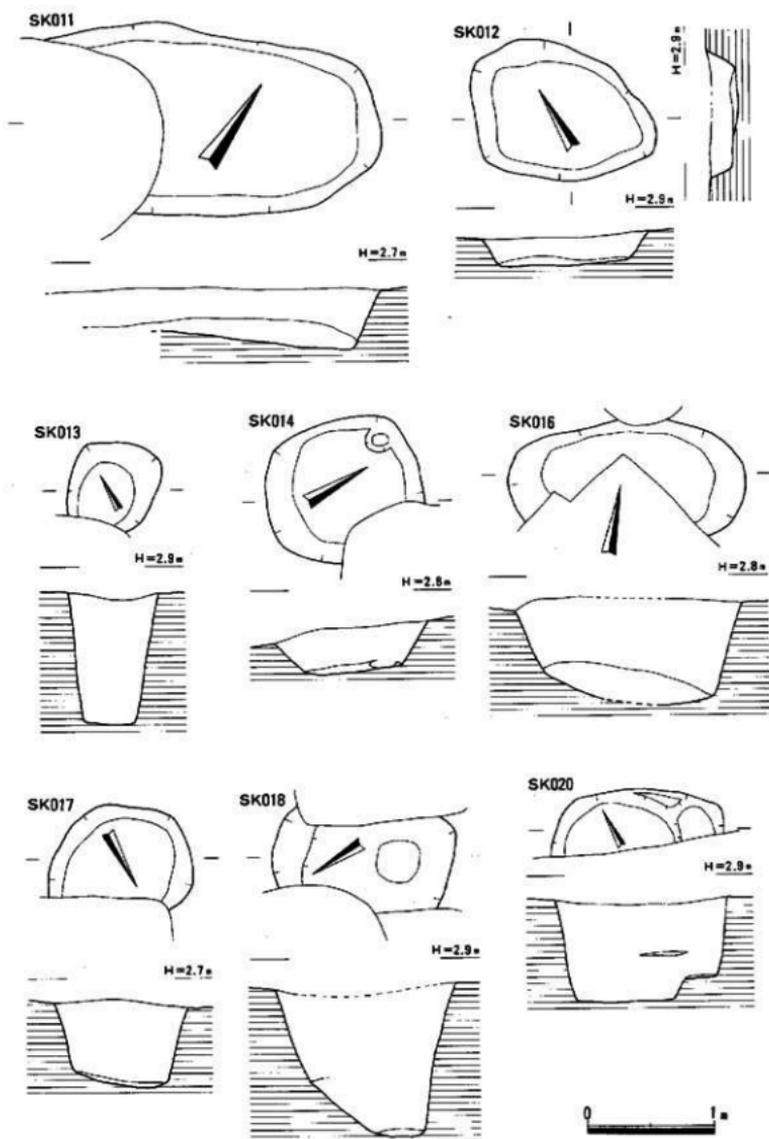
- SK009
- 1 碑石(碑石+土坑)
  - 2a 碑石(碑石+土坑)
  - 2b 碑石(碑石+土坑)
  - 3 碑石(碑石)



第22图 SK008·009实测图(1/40)



第23図 SK008・009出土遺物実測図(152・167・168は1/2、他は1/3)



第24图 SK011-012-013-014-016-017-018-020实测图(1/40)

SK009(第22図) B-2区に位置する。不整な隅丸長方形を呈し、南側に狭い平坦面を有する。長さ4.15m、幅1.9m、底面までの深さ0.9mを測り、ほぼ中央に径約1m、深さ30cmの円形の掘り込みを有する。2層群には炭化物片、焼土塊が多量に含まれる。暗褐色砂質土層と黄褐色砂層の境界部分の下位では壁面がオーバーハングする。出土遺物は大半が上層出土である。SK008に規模、構造等に類似する点が多くみられる。

出土遺物(第23図154~169) 154~161は土師器小皿で、口径は7.8~9.2cmで、平均8.3cm、器高は1.2~1.5cmで、平均は1.4cmである。全て外底部は回転糸切りで、154のみに板状圧痕が認められる。162~165は土師器杯である。口径は11.4~12.1cmで、平均は11.7cm、器高は2.1~3.0cmで、平均は2.6cmである。いずれも回転糸切り底で、162を除いて板状圧痕はない。166は中国陶器の皿で、上げ底の底部から体部が大きく開く。灰色の胎土の全面に褐色の釉が施される。復元口径は9.5cmである。167・168は管状土甕で、共にほぼ完形である。重量はそれぞれ2.65、6.52gを測る。169は瓦質の埴で、片側の端部が遺存する。幅7.8cm、厚さ4.6cmである。13世紀後半から末の遺構と考えられる。

SK010(第18図) A-1区で確認した隅丸長方形の土坑で、西側をSK022に切られる。また、SK013・018を切る。推定の長さ2.9m、幅1.45m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形を呈するが、底面には緩い傾斜がみられる。褐色砂質土と黄褐色砂が互層に堆積する。

出土遺物(第25図170~174) 170・171は土師器杯で、それぞれ口径13.4、12.8cm、器高2.7、2.9cmを測る。共に回転糸切り底で、170は板状圧痕を有する。172は瓦器碗で、体部の中位で鈍く屈曲する。体部内外面の下半には粗いへら研磨を施し、内面の上半にはコテ当て痕が残る。173は同安窯系1-1・b類の青磁碗である。174は滑石製石銅の鋳部分を再加工した製品で、鋳には径約0.5cmの穿孔が認められる。出土土師器から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SK011(第24図) B-1区に位置する。隅丸長方形を呈すると考えられるが、SK003に南西部を切られる。幅1.5m、深さ0.5mを測る。底面は北東側に傾斜を有する。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とし、炭化物、焼土塊を含む。上層には礫が少量みられた。

出土遺物(第25図175~177) 175・176は常滑焼の甕である。共に焼成、胎土が類似するが、縁部部の幅に僅かな差異がある。176の肩部外面には格子目の押印文を有する。他にも細片が多数出土しているが、接合しない。177は平瓦で側面部が遺存する。凹面の側面部よりは布目、凸面には二重格子の叩き目がみられる。また、凹面には135回様に格子目が認められる。常滑焼より13世紀後半の土坑と考えられる。

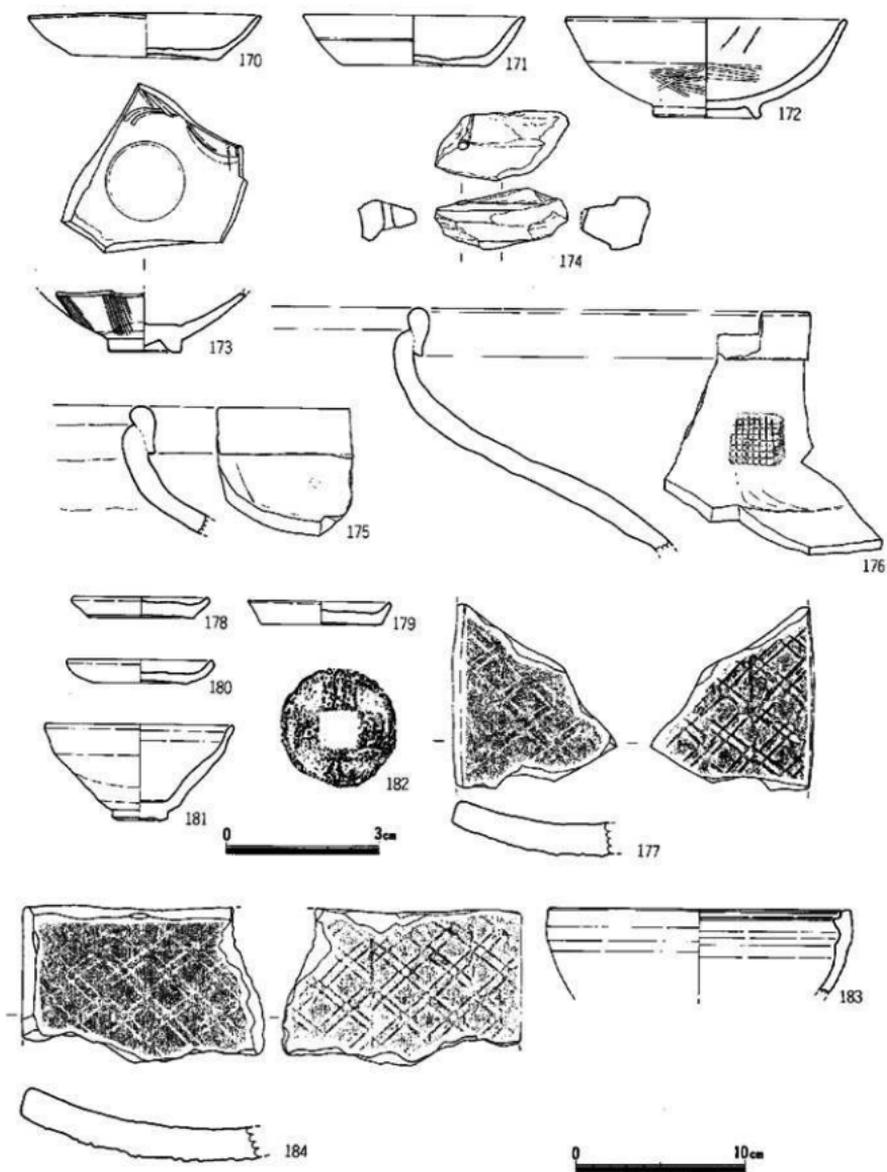
SK012(第24図) A-1区に位置し、SE004を切る。不整な楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.0mを測る。断面は逆台形で、深さは0.2mと浅い。灰茶褐色砂質土を覆土とする。

出土遺物(第25図178~180) いずれも回転糸切り底の上土師器小皿で、178のみに板状圧痕を有する。平均口径は8.1cm、平均器高は1.3cmを測る。13世紀後半の遺構と推定される。

SK013(第24図) A-1区で検出した径0.75mの円形土坑で、SK010に切られる。深さは1.0mを測る。覆土は暗褐色砂質土で、炭化物が少量混じる。

出土遺物(第25図181・182) 181は黒釉磁器である天目碗で、小振りな底部に大きく開く体部がつく。体部の下半は露胎で、茶褐色の化粧土が施される。胎上にはぶい黄褐色を呈する。182は銅銭「開元通寶」(初鑄年:621年)である。不鮮明な銭銘や不整形な孔から模範銭の可能性はある。他に土師器小皿・環、須惠質土器、中国陶器、白磁、同安窯系・龍泉窯系青磁等の細片が出土している。13世紀代の遺構と考えられる。

SK014(第24図) A-1区に位置し、SK001・006に切られる。径1.0~1.2mを測るやや不整な円形



第25図 SK010・011・012・013・014出土遺物実測図(182は1/1、他は1/3)

を呈し、深さ0.35mを測る。灰茶褐色砂質土を覆土とする。

出土遺物(第25図183・184) 183は中国陶器の埴鉢である。内面の口縁部下に2条の突帯が巡る。胎土は淡赤褐色で、多量の砂粒が混じる。遺存部には施釉されない。184は平瓦である。端部および側縁部が残る。凹面には布目、凸面には二重格子の叩き目を施す。また、凹面には135同様に格子目が認められる。13世紀代の遺構であろう。

SK016(第24図) B-1区に位置する。南側は昇降用の階段を設置したため、未掘である。長楕円形を呈すると考えられ、長径1.9mを測る。深さは0.6~0.8mで、東側に傾斜する。

出土遺物(第26図185~187) いずれも回転糸切り底の上師器で、185は小皿である。復元口径8.2cm、器高1.3cmで、板状圧痕はない。185・186は坏で、それぞれ口径12.2、11.9cm、器高2.9、2.3cmを測る。3個体ともヨコナデが内底部までおよぶ。13世紀後半の土坑と考えられる。

SK017(第24図) A・B-1区で検出した土坑である。北東側をSK006に切られるが、径1m前後円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。壁面の立ち上がりは比較的急である。覆土は褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第26図188~202) 188~192は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は8.2~9.0cmで、平均8.6cm、器高は0.8~1.5cmで、平均は1.1cmである。全てに板状圧痕が認められる。193~197は土師器坏で、外底部は回転糸切りである。いずれも板状圧痕を有する。口径は12.2~13.7cmで、平均12.7cm、器高は2.4~3.2cmで、平均2.8cmである。198は中国陶器の瓶である。暗オリーブ灰色の釉が灰色の胎土に施される。外面は黒味が強い。199・200は白磁である。199は水注で、口縁部を垂下させる。釉色は淡灰白である。200は口禿の碗で、高台内まで施釉される。見込みに沈線をも有する。201は同安窯系青磁皿で、体部下半以下は露胎となる。見込みに日跡が残る。202は龍泉窯系青磁碗I-5・b類である。以上の出土遺物から13世紀中頃の遺構と推定される。

SK018(第24図) A-1区に位置し、東西をSK006・010に切られる。幅1.4mが遺存し、南側に小規模な円形の底面を有する。深さは1.2mを測る。検出面に近い上層で炭化物を混じえて土師器小皿が一括で出土した。その下面には断面皿状に黄褐色粘土がみられた。土坑上面から切り込まれた別遺構の可能性もある。

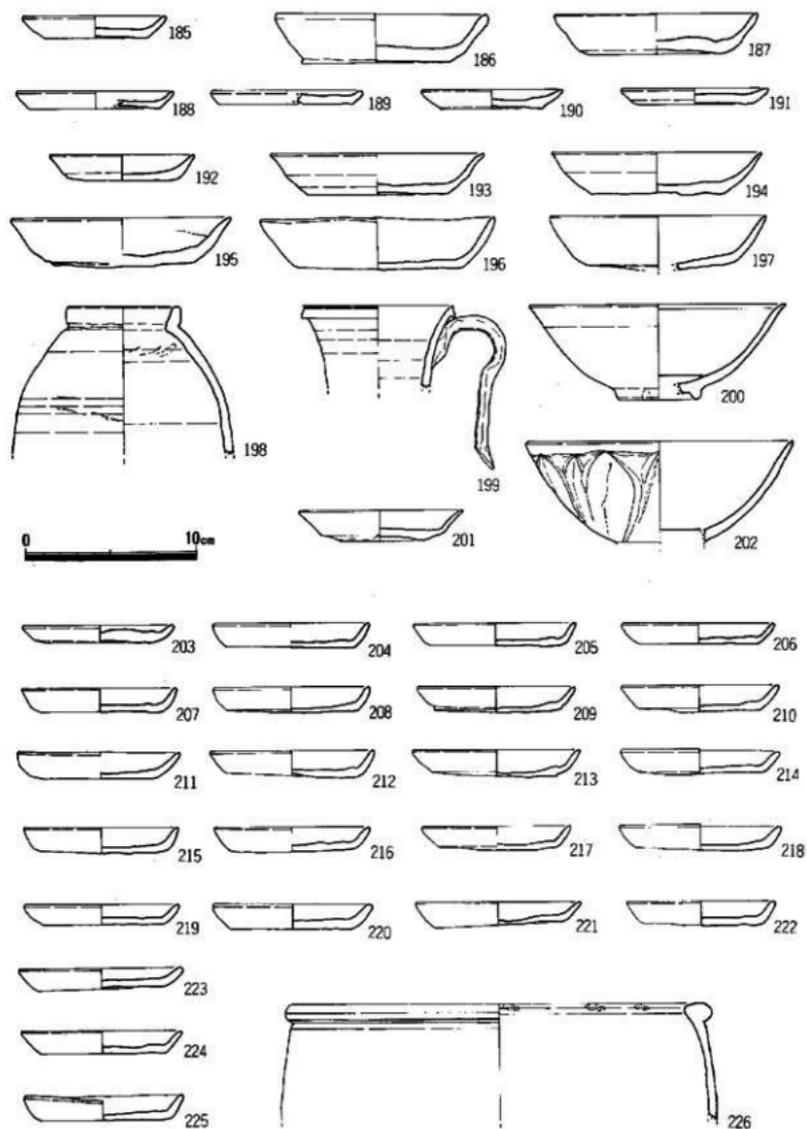
出土遺物(第26図203~226) 203~225は上述した土師器小皿の一括出土遺物で、完形にちかひものが多い。全て外底部は回転糸切りで、203を除いて板状圧痕が認められる。半数以上に口縁端部の一部に煤が付着する。口径は8.6~9.8cmで、平均は9.2cm、器高は1.1~1.6cmで、平均は1.4cmである。226は中国陶器の鉢で、褐釉が施される。下縁状の口縁部上面は露胎で、目跡が認められる。胎土は赤褐色を呈する。土師器の法量から12世紀後半の所産と考えられる。

SK020(第24図) B-2区の壁際に位置する。南側は調査区外に延びる。現存で、長さ1.5m、深さ0.8mを測る。東側には小規模な平坦部が認められた。灰茶褐色砂質土に炭化物が少量混じる。

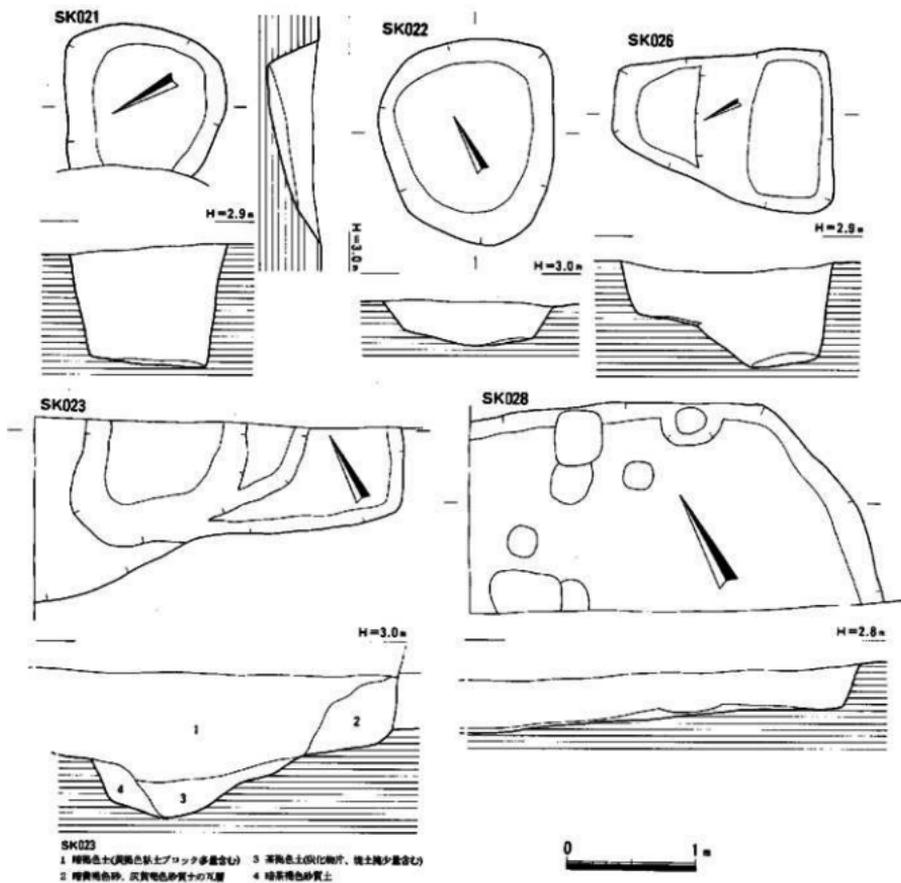
出土遺物(第28図227~230) 227は土師器小皿で、口径8.9cm、器高1.1cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。228は瓦器碗で、内面にはへら研磨を施す。229は龍泉窯系青磁の皿である。見込みに片彫りの花文を描く。230は青白磁の合子蓋である。型押しによる陽刻の花弁が天井部に施文される。釉色は明緑灰色で、内面は露胎である。他の出土遺物に須恵質土器、中国陶器、白磁等がある。13世紀前半の遺構と考えられる。

SK021(第27図) A-1・2区で検出した不整な円形の土坑で、SK010を切り、SK022に切られる。径1.25m、深さ0.95mを測り、壁面は直立気味に立ち上がる。

出土遺物(第28図231・232) 231は土師器小皿で、232は坏である。それぞれ復元口径8.4、12.2cm、



第26图 SK016・017・018出土遺物実測図(1/3)

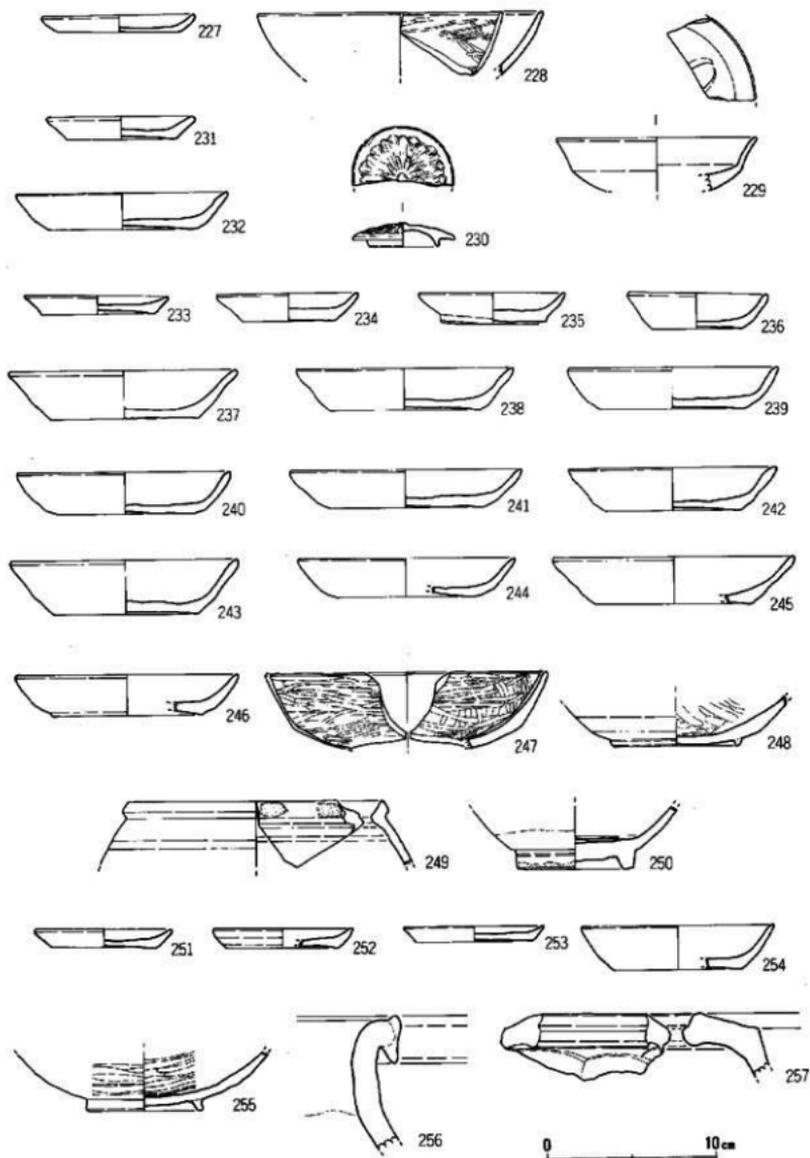


第27図 SK021・022・023・026・028実測図(1/40)

器高1.3、2.1cmを測る。共に回転糸切り底で、232には板状圧痕が認められる。他に白磁、龍泉窯系青磁等が出土している。13世紀中頃から後半の遺構と推定される。

SK022(第27図) A-2区に位置し、上述のSK021を切る。径1.4~1.6mを測る不整な円形を呈する。深さ0.35mで、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は炭化物を少量含む灰茶褐色砂質土で、拳大の礫が投棄される。

出土遺物(第28図233~246) いずれも回転糸切り底の土師器である。233~236は小皿で、板状圧痕は認められない。口径は8.1~8.4cmで平均は8.2cm、器高は1.2~2.2cmで、個体のばらつきが大きい。内底部までヨコナデが及ぶ。237~246は坏である。口径は12.1~14.1cmで平均は12.9cm、器高は2.2



第28图 SK020·021·022·023·026出土遗物实测图(1/3)

～3.1cmで、平均は2.5cmである。約半数の個体は小皿同様にヨコナデを内底部まで施す。他に常滑焼、中国陶器、白磁、龍泉窯系青磁、瓦等が出土した。土師器法量から13世紀後半の遺構と考えられる。

SK023(第27図) A-2区の調査区壁際で検出した。北壁土層(第5図)の観察では、遺構の掘り込み面は検出面より約30cm上層の標高3.1mにある。遺構の北側部分は調査区外に位置するため平面プランは不明である。東側に2段の平坦部を有し、検出面からの深さは1.15mを測る。

出土遺物(第28図247～250) 247・248は瓦器碗である。247は体部中位で屈曲する。内外面共にヘラ研磨を加える。248は断面台形の低い高台を有し、内面はヘラ研磨、外面にはヨコナデを施す。外底部には「×」字と思われるヘラ記号を有する。249は中国陶器の鉢である。灰オリーブの釉が内外面に施される。短く「く」字状に屈曲する口縁部内面には目跡が認められる。250はⅧ類の白磁碗で、見込みには段を有し、その内側の軸を輪状にカキ取る。体部外面の下半は露胎である。見込みの軸カキ取り部と畳付きには目跡が残る。他に土師器皿、龍泉窯系青磁Ⅰ～5類等が出土している。13世紀前半の遺構であろう。

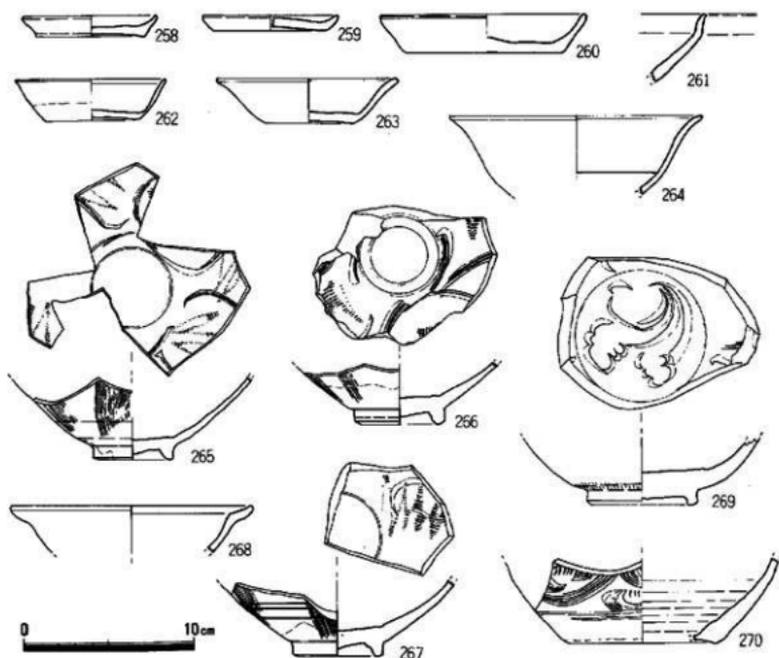
SK026(第27図) B-2区に位置する平面台形状の土坑である。幅0.6～1.3m、長さ1.7m、深さ0.75mを測る。北側には平坦面を有し、壁面は斜めに立ち上がる。暗茶褐色土の覆土を主体とする。

出土遺物(第28図251～257) 251～253は回転糸切り底の土師器で、順に口径7.8、8.0、8.1cm、器高1.1、1.1、0.9cmを測る。253のみに板状圧痕が認められる。254は土師器坏で、復元口径11.2cm、器高2.6cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。255は瓦器碗である。内外面にヘラ研磨を施し、外底部には板状圧痕が認められる。256は常滑焼製の口縁部片で、口縁縁部部の幅は2.8cmを測る。内面には接合痕が残る。257は中国陶器の甕である。口縁部を内側に屈曲させる。暗赤灰色の胎土にオリーブ黄色の釉が施される。体部内面には青海波状の当て具痕の一部が残る。13世紀後半の所産と考えられる。

SK028(第27図) B-3・4区の調査区壁際で確認したSK030を切る土坑である。南側は調査区外に位置するため、プラン、規模は不明である。現存で、深さ0.4mを測り、底面は緩く西側に傾斜する。覆土は茶褐色弱粘質土を呈する。

出土遺物(第29図) 258～260は回転糸切り底の土師器である。258・259は小皿で、それぞれ口径7.9、8.0cm、器高1.2、0.9cmを測る。258には板状圧痕が認められる。260は坏である。口径11.9cm、器高2.3cmで、板状圧痕はない。261は黒軸磁器の天目碗である。灰色の胎土に光沢のある黒色釉が施される。図上での外面下端部は露胎となる。262～264は口禿の白磁で、262・263は皿である。262の体部外面の下半は露胎である。263は体部を外反させるもので、外底部の軸を拭き取る。264は碗で、体部内面には沈線を有する。265～267は同安窯系Ⅰ類の青磁碗で、オリーブ灰色の釉が施される。櫛状工具およびヘラによる片彫りの施文がなされる。外面体部の下半以下は露胎である。268・269は龍泉窯系青磁である。268はⅢ類の坏で、丸味のある体部に内湾する口縁部がつく。釉色は淡緑色である。269は碗で、見込みに草花文を片彫りする。Ⅰ～4類と考えられる。270は青白磁の梅瓶の底部で、釉は明緑灰色を呈する。外底部は露胎で、淡赤褐色をなす。櫛目および片彫りによる施文を有する。胎土は白色で、黒色の粒子が混じる。他に中国陶器、瓦が出土している。以上の出土遺物から13世紀後半に比定されよう。

SK029(第30図) B-3区で検出した隅丸長方形の土坑で、長さ2.05m、幅1.8mを測り、南北方向にやや長い。深さは約0.6mを測り、底面はほぼ平坦である。土坑内の構造は幅15cm、厚さ数cm程度の板材2枚を壁面沿いに折状に組み、内側で径数cmの丸杭により密めている。東側壁面では板材が比較的良好に遺存する。また、杭そのものは数本しか遺存しないが、その痕跡である小ピットを底面

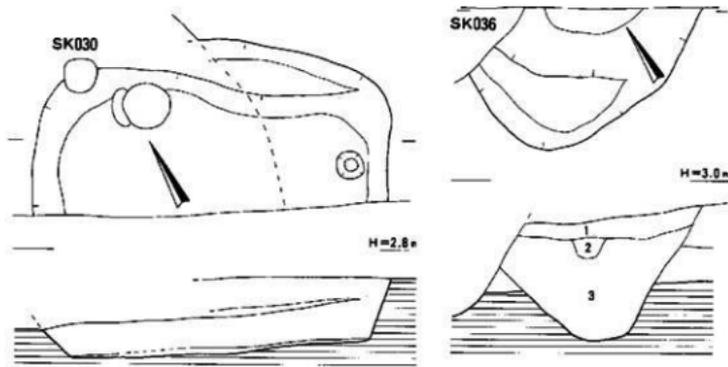
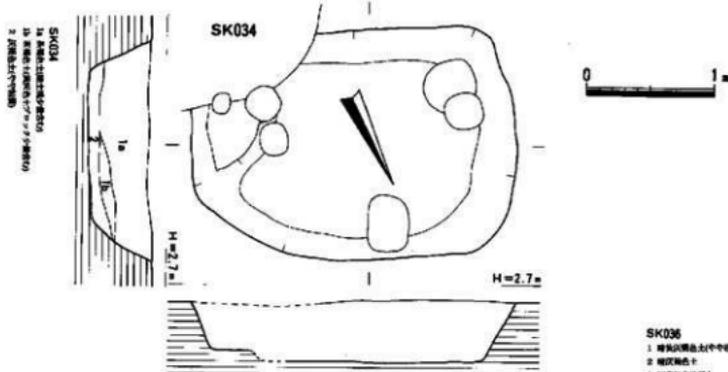
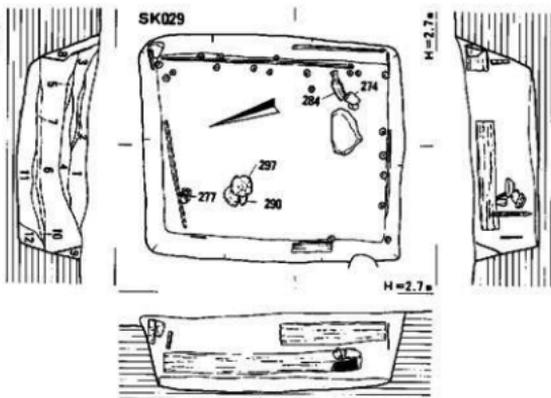


第29図 SK028出土遺物実測図(1/3)

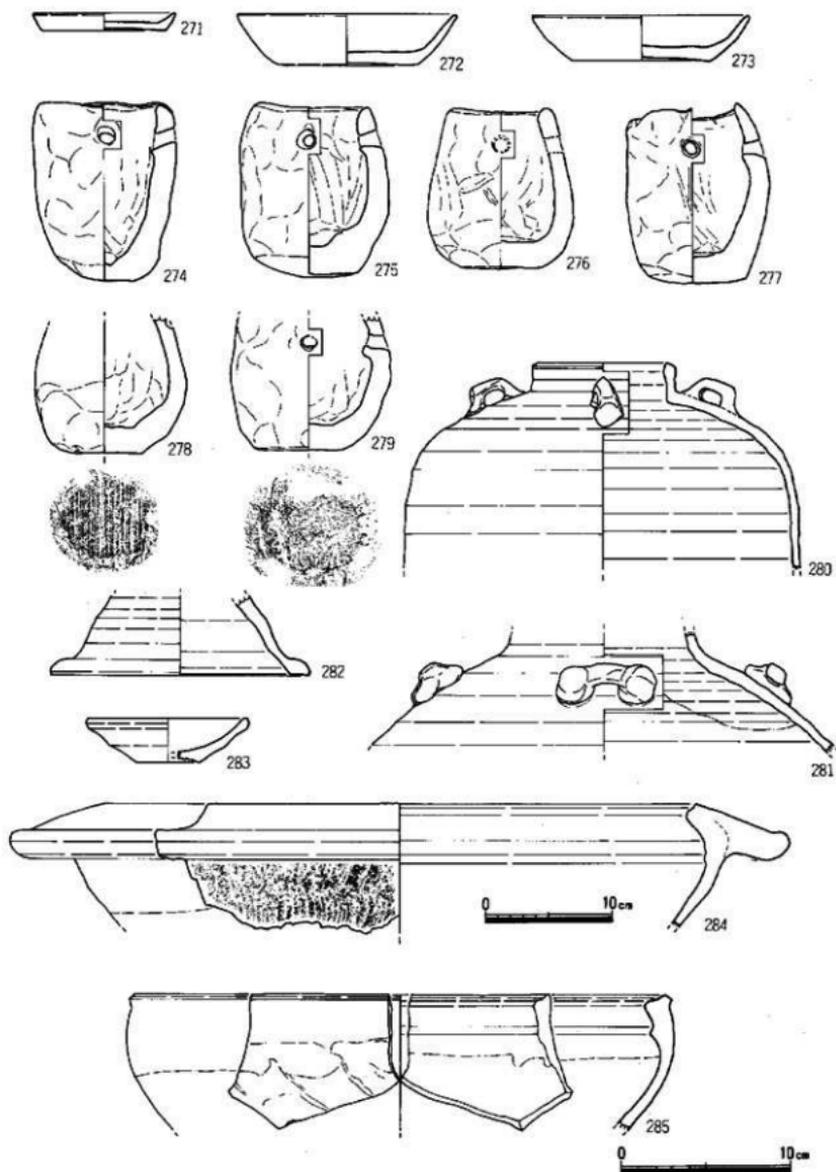
で多数確認できた。上層観察から10~12層によって底面を平坦に整地し、炭化物(7層)を敷いているものと考えられ、その7層面で板材や出土遺物の下端レベルがほぼ一致する。その7層上面では完形に近い飯ダコ壺(274・277)、白磁皿(290)、青白磁碗(297)等が出土した。また、8・9層は板材設置時の裏込め土であろう。

出土遺物(第31・32図) 271~279は土師器である。271は小皿で、口径8.0cm、器高1.1cm、272・273は坏で、共に復元口径は12.7cm、器高は順に3.0、2.6cmである。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕はない。274~279は飯ダコ壺である。外面は指オサエ、内面は指ナデを施す。体部上位には焼成前に孔が外面から内面に向かって穿たれ、内面に粘土の隆起が認められる。278・279の外底部には板状圧痕を有する。280~287は中国陶器である。280・281は四耳壺で、280は短い直立する1縁部を有する。灰白色の胎土には砂粒が多量に混じり、内外面共に施釉はされない。口縁部の外面のみ明茶褐色を呈する。281は横耳が付くもので、黄釉が灰色の胎土に外面および内面の頸部付近まで施釉される。282は褐釉の壺で、口縁平坦部には目跡が残る。283は皿で、全面に褐釉が施釉される。底部は上げ底を呈する。284は外類する「T」字状の口縁部を有する大形の鉢である。釉は口縁部上面および内面は暗オリーブ色、体部外面上半はくすんだ黄褐色である。胎土は黒灰色で、砂粒が多量に混じり、露胎となる体部下半は赤灰色を呈する。外面には叩き目が残る。復元口径は61.0cmである。285は控鉢で、

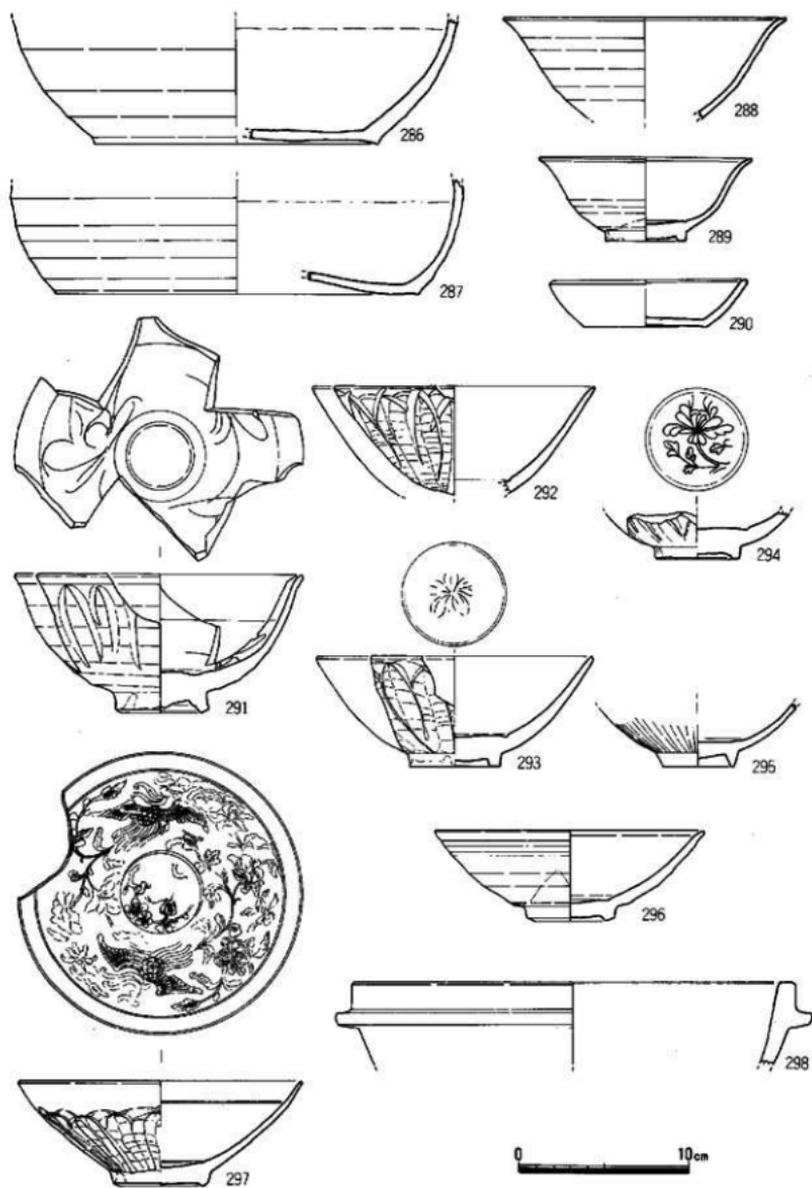
- SK029
1. 遗址的平面位置图
  2. 遗址的平面位置图
  3. 遗址的平面位置图
  4. 1.2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100.101.102.103.104.105.106.107.108.109.110.111.112.113.114.115.116.117.118.119.120.121.122.123.124.125.126.127.128.129.130.131.132.133.134.135.136.137.138.139.140.141.142.143.144.145.146.147.148.149.150.151.152.153.154.155.156.157.158.159.160.161.162.163.164.165.166.167.168.169.170.171.172.173.174.175.176.177.178.179.180.181.182.183.184.185.186.187.188.189.190.191.192.193.194.195.196.197.198.199.200.201.202.203.204.205.206.207.208.209.210.211.212.213.214.215.216.217.218.219.220.221.222.223.224.225.226.227.228.229.230.231.232.233.234.235.236.237.238.239.240.241.242.243.244.245.246.247.248.249.250.251.252.253.254.255.256.257.258.259.260.261.262.263.264.265.266.267.268.269.270.271.272.273.274.275.276.277.278.279.280.281.282.283.284.285.286.287.288.289.290.291.292.293.294.295.296.297.298.299.300.301.302.303.304.305.306.307.308.309.310.311.312.313.314.315.316.317.318.319.320.321.322.323.324.325.326.327.328.329.330.331.332.333.334.335.336.337.338.339.340.341.342.343.344.345.346.347.348.349.350.351.352.353.354.355.356.357.358.359.360.361.362.363.364.365.366.367.368.369.370.371.372.373.374.375.376.377.378.379.380.381.382.383.384.385.386.387.388.389.390.391.392.393.394.395.396.397.398.399.400.401.402.403.404.405.406.407.408.409.410.411.412.413.414.415.416.417.418.419.420.421.422.423.424.425.426.427.428.429.430.431.432.433.434.435.436.437.438.439.440.441.442.443.444.445.446.447.448.449.450.451.452.453.454.455.456.457.458.459.460.461.462.463.464.465.466.467.468.469.470.471.472.473.474.475.476.477.478.479.480.481.482.483.484.485.486.487.488.489.490.491.492.493.494.495.496.497.498.499.500.501.502.503.504.505.506.507.508.509.510.511.512.513.514.515.516.517.518.519.520.521.522.523.524.525.526.527.528.529.530.531.532.533.534.535.536.537.538.539.540.541.542.543.544.545.546.547.548.549.550.551.552.553.554.555.556.557.558.559.560.561.562.563.564.565.566.567.568.569.570.571.572.573.574.575.576.577.578.579.580.581.582.583.584.585.586.587.588.589.590.591.592.593.594.595.596.597.598.599.600.601.602.603.604.605.606.607.608.609.610.611.612.613.614.615.616.617.618.619.620.621.622.623.624.625.626.627.628.629.630.631.632.633.634.635.636.637.638.639.640.641.642.643.644.645.646.647.648.649.650.651.652.653.654.655.656.657.658.659.660.661.662.663.664.665.666.667.668.669.670.671.672.673.674.675.676.677.678.679.680.681.682.683.684.685.686.687.688.689.690.691.692.693.694.695.696.697.698.699.700.701.702.703.704.705.706.707.708.709.710.711.712.713.714.715.716.717.718.719.720.721.722.723.724.725.726.727.728.729.730.731.732.733.734.735.736.737.738.739.740.741.742.743.744.745.746.747.748.749.750.751.752.753.754.755.756.757.758.759.760.761.762.763.764.765.766.767.768.769.770.771.772.773.774.775.776.777.778.779.780.781.782.783.784.785.786.787.788.789.790.791.792.793.794.795.796.797.798.799.800.801.802.803.804.805.806.807.808.809.810.811.812.813.814.815.816.817.818.819.820.821.822.823.824.825.826.827.828.829.830.831.832.833.834.835.836.837.838.839.840.841.842.843.844.845.846.847.848.849.850.851.852.853.854.855.856.857.858.859.860.861.862.863.864.865.866.867.868.869.870.871.872.873.874.875.876.877.878.879.880.881.882.883.884.885.886.887.888.889.890.891.892.893.894.895.896.897.898.899.900.901.902.903.904.905.906.907.908.909.910.911.912.913.914.915.916.917.918.919.920.921.922.923.924.925.926.927.928.929.930.931.932.933.934.935.936.937.938.939.940.941.942.943.944.945.946.947.948.949.950.951.952.953.954.955.956.957.958.959.960.961.962.963.964.965.966.967.968.969.970.971.972.973.974.975.976.977.978.979.980.981.982.983.984.985.986.987.988.989.990.991.992.993.994.995.996.997.998.999.1000.
  7. 遗址的平面位置图



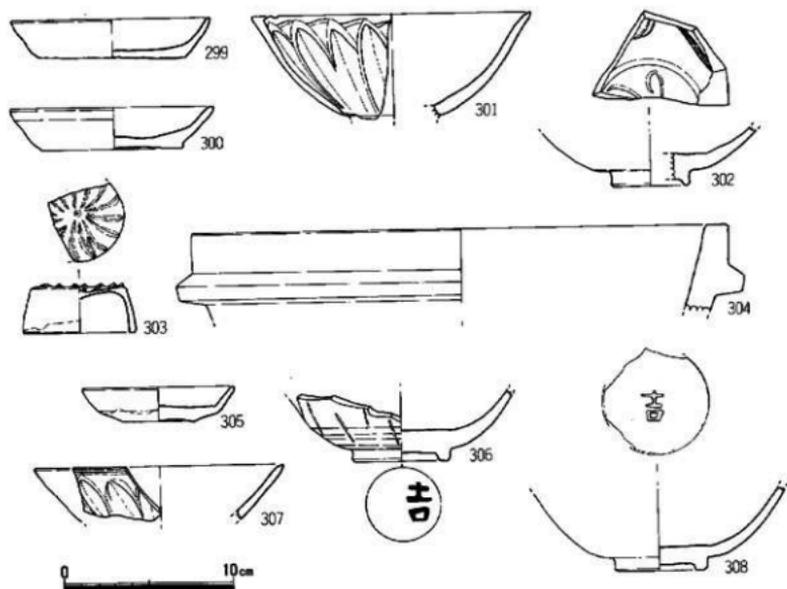
第30图 SK029·030·034·036实测图(1/40)



第31図 SK029出土遺物実測図(1)(284は1/4、他は1/3)



第32图 SK029出土遗物实测图(2)(1/3)



第33図 SK030・034・036出土遺物実測図(1/3)

口縁部内面下には断面三角形の突帯が1条巡る。灰オリーブ色の釉が施軸されるが、内外面共に体部下半は露胎である。286は鉢または盤で、オリーブ黄色の釉が内面に施される。露胎となる外面は淡赤褐色を呈する。外底部および見込みには目跡が認められる。287は黄釉の盤で、内面のみに施軸されるが、一部に灰白色の化粧土がみられる。露胎である外面は暗赤褐色を呈する。288～290は口縁の白磁で、288・289は碗である。289の体部下半は露胎で、見込みには沈線有する。290は皿である。全面施軸後に外底部の釉を拭き取る。291～295は外面に蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗である。291は口縁部を緩く外反させ、幅の狭い蓮弁には鎊はない。化粧土を施し、畳付きおよび高台内を除いて淡緑灰色の釉が施軸される。全体に貫入が多くみられる。内面には線彫りの花文を有する。292～294はI～5類に属するものである。292は外面の鎊を作出する削り痕が明瞭に残る。293は見込みに印花文を有する。294も見込みに花文を有するが、線彫りによるものである。295はⅢ類の碗で、露胎となる畳付きはやや幅広に削られ、暗赤褐色に発色する。296は同安窯系青磁碗で、大きく開く体部を有し、内外面共に施文されない。透明なオリーブ灰色の釉が内面および体部外面の下半まで施される。高台内の削り出しは浅い。297は青白磁の碗である。外面には片彫りによる鎊蓮弁を有するが、弁先の片彫りは大きくカーブを描き、丸く仕上げる。また、鎊を作る削り痕が観察できる。内面には型押しにより2羽の鳳凰と牡丹唐草と思われる草花文が配される。圏線を有する見込みには三日月と梅の下り枝とみられる文様が型押しされる。釉色は明緑灰色で、内面には水裂が多い。畳付きおよび高台内には施軸されない。高台内の削りは浅く、底部の器肉は厚い。298は滑石裂石鎊で、外面の鈿以下

には煤の付着が著しい。復元口径は25.6cmを測る。以上の出土遺物から13世紀後半の土坑と考えられる。

SK030(第30図) B-3区の壁際に位置する。南側は調査区外に延び、西側の上層はSK028に切られる。深さ0.6mを測り、底面は緩く西側に傾斜する。北側には狭い平坦面がみられる。灰褐色の粘性のある砂質土を覆土とし、上層には焼土塊や炉壁と考えられる粘土塊が認められた。

出土遺物(第33図299~304) 299・300は回転糸切り底の土師器坏である。共に完形で、順に口径11.4、11.7cm、器高2.2、2.5cmを測る。ヨコナデが内底部までおよぶ。299には板状圧痕が認められる。301・302は龍泉窯系青磁碗である。301は外面に蓮弁を有し、釉色は淡緑色を呈する。302は体部内面および見込みに草花文を片彫りする。壺付きおよび高台内は露胎である。303は青白磁梅瓶の蓋で、天井部には型押しによる放射線状の浮文を有する。軸は不透明な明灰白で、口縁部外面および内面は露胎である。304は滑石製石鍋である。研磨を施すが、口縁部外面にはノミによる細かい削痕が残る。他に中国陶器、白磁等の細片が出土した。13世紀後半から末の遺構であろう。

SK034(第30図) B-3区に位置し、SE033に切られる。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.55m、幅1.8m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形をなす。

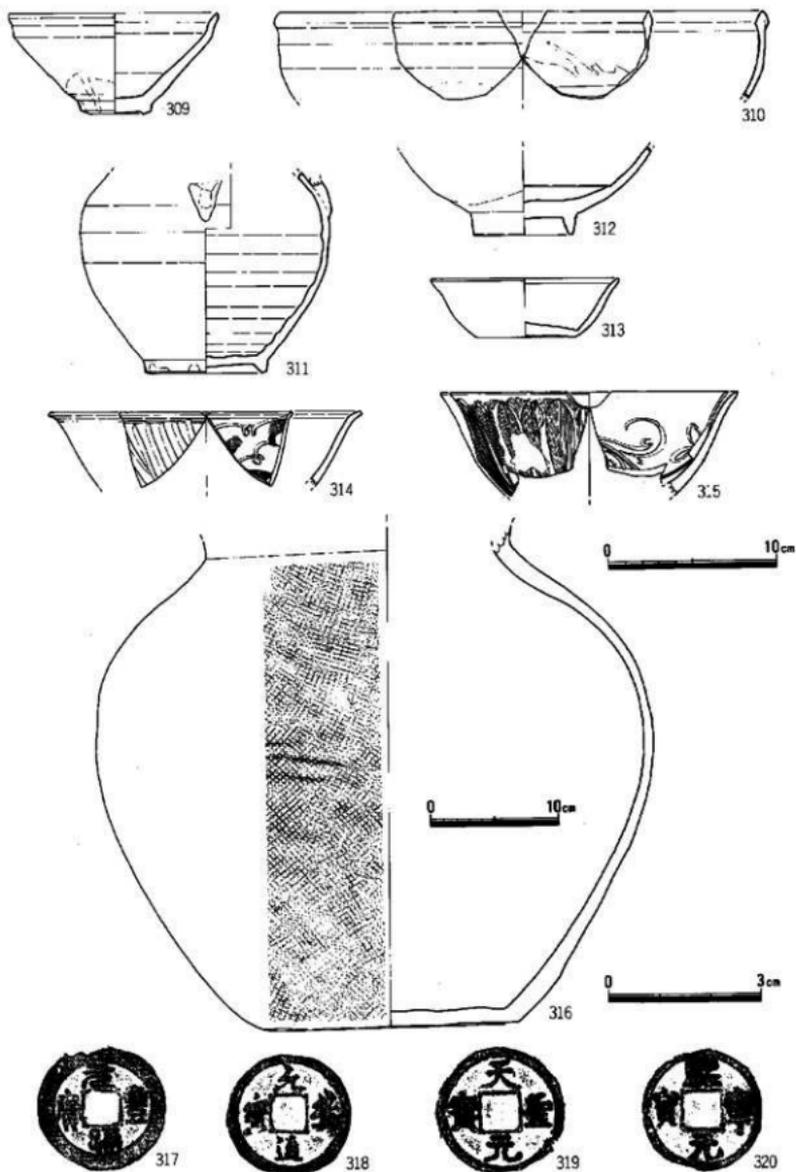
出土遺物(第33図305・306) 305は白磁皿で、体部中位で屈曲する。見込みに丸線が巡る。外面下半以下は露胎である。上層で出土した。306は龍泉窯系青磁碗である。外面には蓮弁の片彫りがみられるが、鑄はないものと思われる。見込みに極めて不鮮明ながら「金玉満堂」の印文が認められる。また、外底部には「吉」の墨書が記される。壺付きおよび高台内は露胎である。2層からの出土である。他に土師器、瓦器、須恵質土器、中国陶器、同安窯系青磁等の細片が出土している。12世紀後半から13世紀前半の遺構と考えられる。

SK036(第30図) A-2区の壁際で検出した。暗黄褐色上層上面から掘り込まれる。西側はSE035に切れ、北側が調査区外に位置するため、全容は不明である。現存では南側に平坦面を有し、壁面は播鉢状にすばまる。深さは0.95mを測る。

出土遺物(第33図307・308) 共に龍泉窯系青磁碗である。307は外面に蓮弁を有する。鑄は鈍い。308は外面は無文で、見込みに「吉」が隔刻で印文される。釉色は前者が淡緑色、後者がオリーブ灰色を呈する。他に土師器小皿、中国陶器、飯ダコ壺等の細片が出土している。13世紀前半の遺構と考えられる。

### 3) その他の遺物(第34図)

ここではピット、包含層、検出面から出土した遺物についてとりまとめて報告する。紙面の都合上、一部の遺物しか掲載し得なかった。309は黒釉施釉の天目碗で、釉尻には茶褐色の化粧土が認められる。A-3区下面のSP189から出土した。310は中国陶器の三彩盤で、口縁部は玉縁状を呈する。光沢のある緑釉を主体とし、内面下半にはガラス質の黄褐色の釉がみられる。露胎となる体部下半は淡黄褐色である。西側検出面出土である。311~320は包含層出土である。311~313は白磁で、311は水注もしくは四耳壺、312はV類の碗、313は口禿の皿で、外底部の軸は粗く拭き取る。314は龍泉窯系I類青磁碗で、外面は縦方向の片彫り、内面は片彫り、櫛状工具による施文がなされる。315は龍泉窯系の青磁碗I-6・b類で、外面に櫛目を加える。316は須恵質の甕で、調査区壁面に一部が露出していたものを取り出した個体である。外面は格子目の叩き、内面は一部当て具痕が残るものの、ナデ消す。317~320は316中より出土した北宋代の銅銭である。317・318は「元豊通寶」(初鑄年:1078年)、319は「天聖元寶」(同:1023年)、320は熙寧元寶(同:1068年)である。



第34図 ビット・包含層・検出面出土遺物(310・316は1/4、317~320は1/1、他は1/3)

### 3. 結語

今回の調査区は砂丘北西部の西側緩斜面に立地し、検出した遺構は13世紀代が主体を占める。個別の遺構時期については本文中で触れたが、まず、本項ではその年代観について補足説明を加える。山本編年<sup>1)</sup>に基づき、輸入磁器の組成をもとにおおよそ龍泉窯系および同安窯系青磁のⅠ類(龍泉窯系Ⅰ-Ⅴ類を除く)のみで組成される場合を12世紀後半(以下Ⅰ期)、龍泉窯系Ⅰ-Ⅴ類(鶴蓮弁文)を主体とし、龍泉窯系青磁Ⅲ類や白磁Ⅸ類(口禿碗・皿)を含まない場合を13世紀前半(同Ⅱ期)、前述した龍泉窯系Ⅲ類および白磁Ⅸ類が主体となる場合を13世紀後半~14世紀初頭(同Ⅲ期)とした。また、それらに土師器法量による細分時期等を加味し、時期比定を行っている。

Ⅰ期の遺構は希少であるが、SK018を指摘し得る。図化した23個体の土師器小皿の法量から該期に属するものと考えられ、今回検出した遺構の中では最古段階に属する。Ⅱ期に該当する遺構としてSE002・038、SK020・023・036が挙げられる。井戸の存在から該地での集落定形化が進行する時期であろう。Ⅲ期に至ると遺構の急増が認められ、上に挙げた以外の大半の遺構が収まるものと考えられる。SE004は龍泉窯系Ⅲ類と白磁Ⅸ類のセットが良好に出土した例である。小片であるが、常滑焼(15・16)の時期も矛盾はない。SK003は土師器小皿および坏が炭化物層を挟み多数廃棄される。法量の小形化がすすんでおり、13世紀末から14世紀初頭に比定される。SK008・009の両者はほぼ直交する位置に近接して掘削され、出土遺物が示す時期(13世紀後半から末)からも同時期併存した可能性が高い。SK029はその構造や遺物出土状況から小規模な貯蔵施設とみられる。輸入陶磁器と漁猟具である飯ダコ壺の共存は当時の該地の生業を伺い知ることができる。Ⅲ期以後の14世紀前半以降には遺構が認められず、僅か1世紀足らずで集落の解体が行われる。

本調査区で認められた集落の时期的動向を周辺調査区成果と対比させてみる。約100m東側の近接した地点では第6・10次調査が実施されている(第2図参照)。「Ⅱ. 遺跡の立地と環境」でも触れたが、第10次調査区のほぼ中央に砂丘尾根が位置すると考えられ、それに南接する第6次調査区も同様の立地を有するものと考えられる。よって両調査区は本調査区同様の西側緩斜面およびそれに加え、尾根を挟んだ東側緩斜面に位置している。第6次調査では近世遺構を除くと、本項Ⅰ期に属する井戸、土坑が確認されている。青磁は龍泉窯系(Ⅰ-Ⅴ類を除く)および同安窯系のⅠ類で構成され、回転糸切り底の土師器は小皿・坏共に法量の大形化が顕著である。龍泉窯系Ⅰ-Ⅴ類およびⅢ類等は出土していない。また、第10次調査区では同様に近世を除けば、第6次調査同様にⅠ期に属するものが大半を占め、多数の井戸、土坑が重複した状況で検出されている。Ⅱ・Ⅲ期に属する井戸、土坑もみられるが、前段階に比するとその数量は僅少である。ただし、その分布は西側緩斜面への偏りが取られる。なお、14世紀代の遺構は確認されていない。これら3調査区の成果から砂丘北端部では砂丘尾根周辺から東側緩斜面を主体に12世紀後半頃中世集落が形成される。第10次調査区の遺構密度から類推するとその出現のあり方は急激で、出土遺物量も一定量を有している。13世紀前半からは西側緩斜面へと生活の場が移動し、西側(海側)への整地をすすめながら、13世紀後半に至っている。本調査区北壁土層(第5図参照)の西端に認められる薄い水平堆積層はその整地を示す層と考えられる。これら集落の消長について、その各々の契機を言及することは現段階ではできないが、本遺跡内の他調査地点との时期的動向とも連動させ、まず、その画期を模索する必要がある。なお、第1表に示した様に遺跡内でのエリアによって时期的消長は大きく異なっている。また、それらをふまえた上での地理的および集落的景観の復元も今後の課題といえる。

註

1) 山本信夫「中世前期の青磁陶磁器」『藤原 中世の上層・陶磁器』青磁社(1998年)

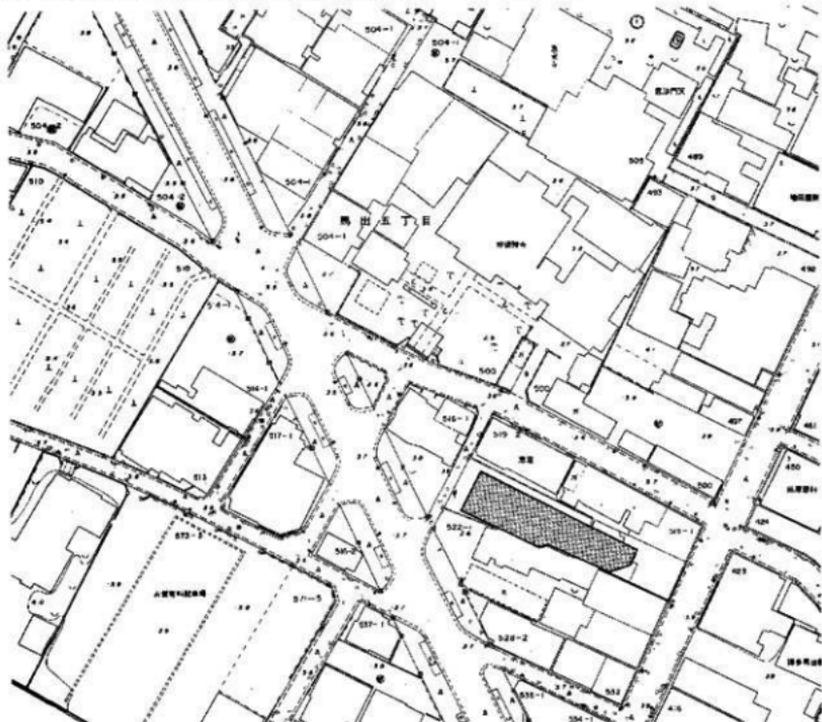
2) 山本信夫「続」上の土師器-歴史時代土師器の編年研究によって-」『越前県先生古蹟記念 九州上代文化論集』(1990年)

## IV. 第13次調査の記録

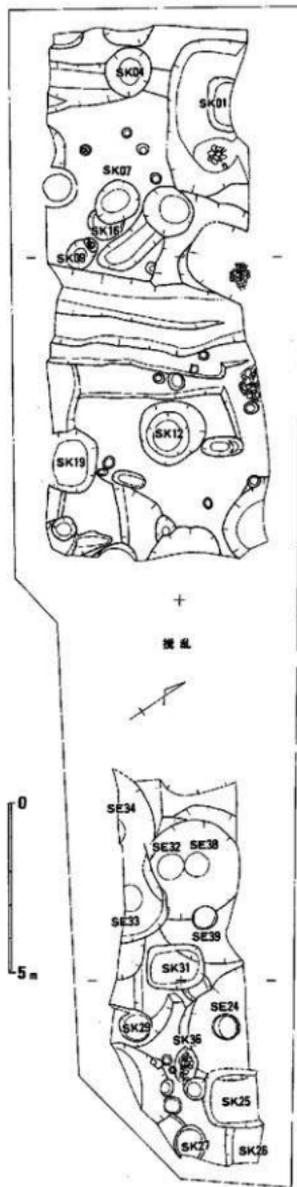
### 1. 調査概要

箱崎遺跡第13次調査地は、東区馬出5丁目520・521にかけて所在する。宮崎八幡宮の南西100mに位置する。南側は地下鉄建設に伴って調査されている。

排土は調査区域内で処理することとし、調査区を東西に二分し、調査は1997(平成8)年10月27日に、西半部の表土剥ぎから着手した。遺構は現地地表下1～1.5mの黄褐色砂質土上面(標高2m)で確認された。西半部の調査区では14世紀後半～15世紀前半の土壇10基、溝2条、柱穴12を検出した。土壇の内3基は栗石が据えられ、3.4mの等間隔に並ぶ。礎石建て建物の柱基部か。主軸方位は東偏30°を取る。柱穴の内3個は根石を有し、柱間距離1.4m前後の2間×5間以上の東西棟が復元される。11月10日には全景写真撮影、遺構実測を終え、13日から残り東半部の打ってがえしにはいった。東半部の調査区では14世紀後半～15世紀前半の遺構に加え、15世紀後半～16世紀後半の遺構を検出したが、西半部では全く検出されなかった井戸を7基検出した。内5基には桶組、1基には瓦組の井戸枠が残存し、残り1基は掘り方のみの検出である。他に底面粘土貼りの方形土壇2基を検出した。20日に全景及び個別の写真撮影を行った後、遺構実測を終え、12月2日に発掘機材の撤収をもって調査は終了した。申請面積471.37㎡の内、調査面積は法面掘削を行った297㎡である。



第35図 第13次調査区位置図(1/1,000)



第36図 第13次調査区遺構配置図(1/150)

## 2. 遺構と遺物

### 1) 井戸

計7基検出した。すべて調査区の東側に集中している。

SE24(第38図、図版10) 東側調査区の北東で検出した。掘り方は上面径3.3mの略円形を呈し、深さ2.4m、底面の標高1.2mを測る。標高1.6mで瓦組の井戸枠を確認した。3段に積まれ、径75cmを測り、1段あたり、高さ35cm、幅22cm、厚さ3cmの瓦9枚を用いている。最下段瓦組の内側には径65cm、深さ70cmの桶側が据え置かれていた。幅9cm、厚さ1cmの板材18枚を用い、板材内側の下端10cmを削り矢板状になしている。SK25・36に切られる。

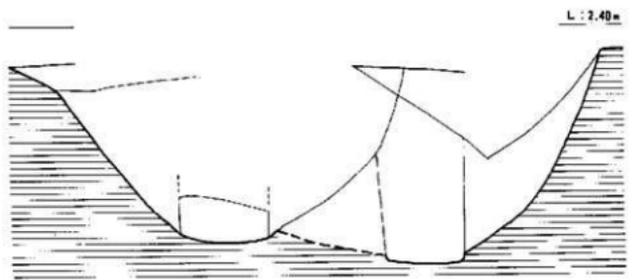
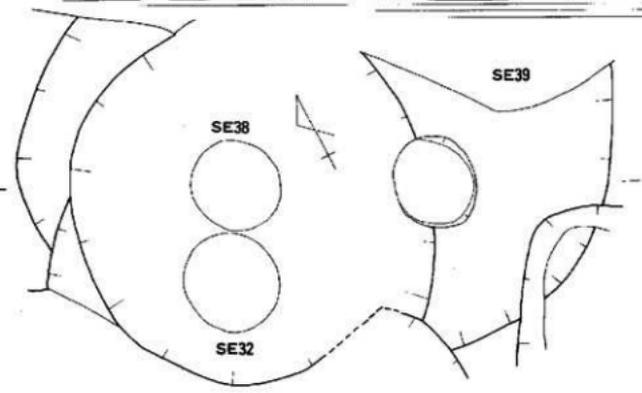
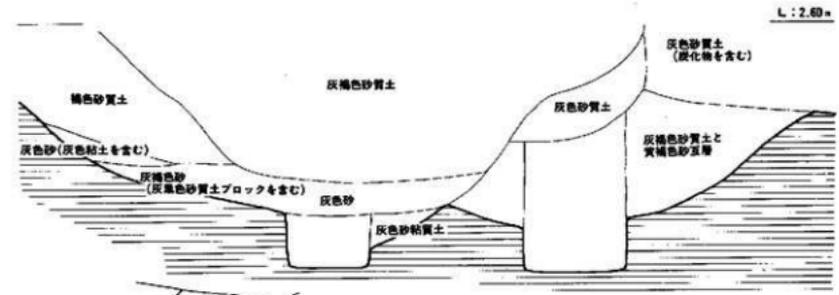
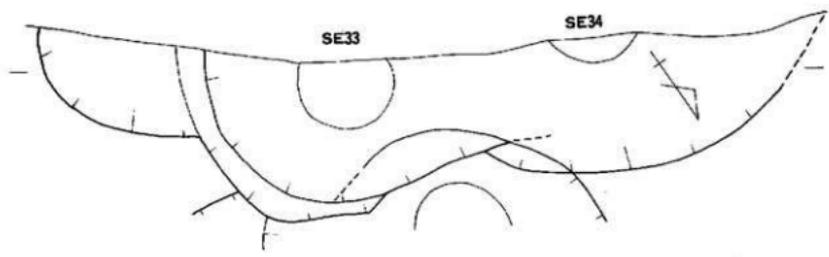
SE28(第36図、図版9) 東側調査区の南東端で掘り方の一部を検出した。上面径2.8m以上、深さ85cm、標高1.7mまで検出した。掘り方のほとんどは壁面にかかり、調査区外に延びる。

SE32(第38図、図版10) 東側調査区の西側、SE33の北側で検出した。掘り方は上面径0.8mの略円形を呈し、深さ1.0m、底面の標高0.6mを測る。基底部のやや南側に径70cm、深さ40cmの桶側の残欠とみられる木質が残る。SE33に切られ、SE38・39を切る。

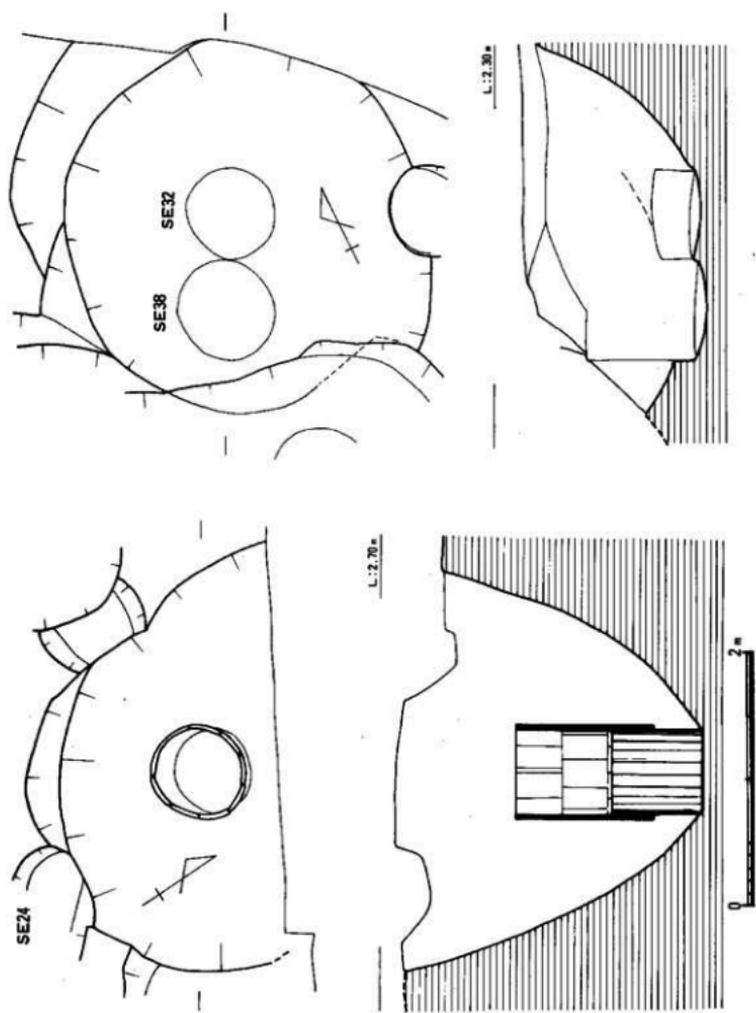
SE33(第37図、図版10) 東側調査区の南西端で検出した。掘り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さ1.9m、底面の標高0.7mを測る。基底部中央に径65cm、深さ40cmの桶側の残欠とみられる木質がわずかに残る。SE32・34を切る。南側は壁面にかかり、半部は調査区外に延びる。

SE34(第37図、図版11) 東側調査区の南西端、SE33の西側で検出した。掘り方は上面径2.1mの略円形を呈し、深さ2.0m、底面の標高0.6mを測る。基底部中央に径80cm、深さ120cmの桶側の残欠とみられる木質がわずかに残り、その内側には拳大の礫が流れ込んでいた。上部にあった石積みが崩壊し流れ落ちたものであろうか。SE33に切られる。南側は壁面にかかり、南半部は調査区外に延びる。

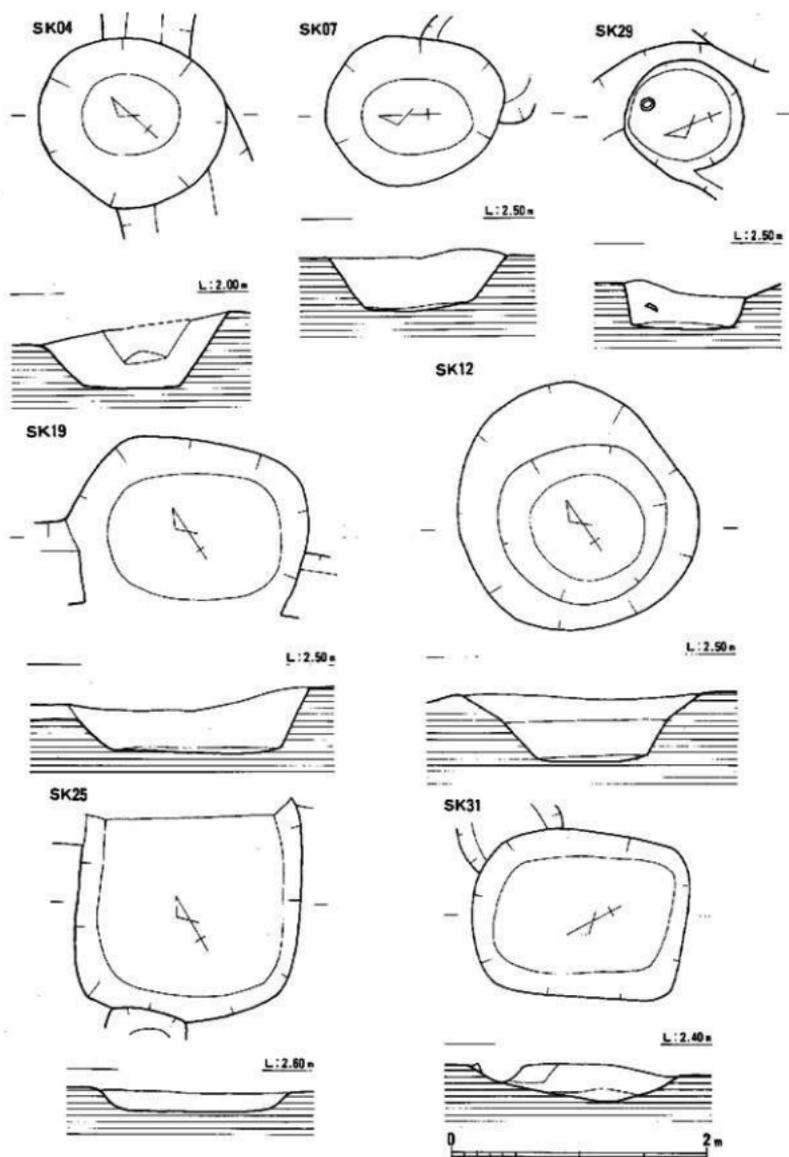
SE38(第37図、図版10) 東側調査区の西側で、SE32の掘り方を掘り下げる際に検出した。掘り方のほとんどはSE32によって掘削されており、規模



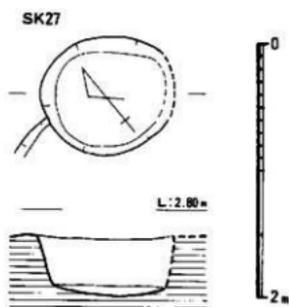
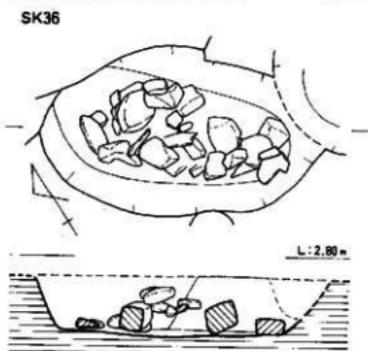
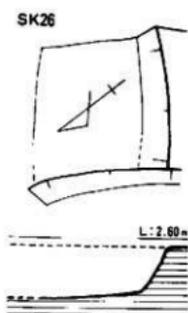
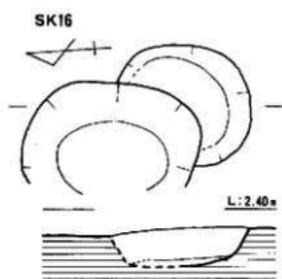
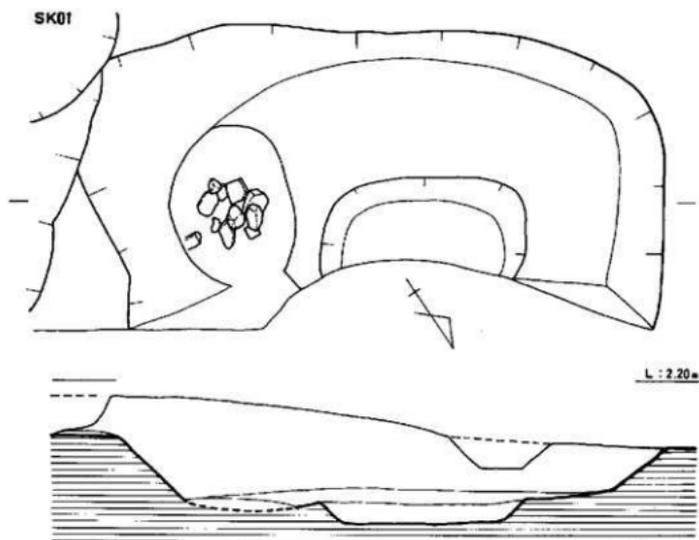
第37図 SE33・34・38・39実測図(1/40)



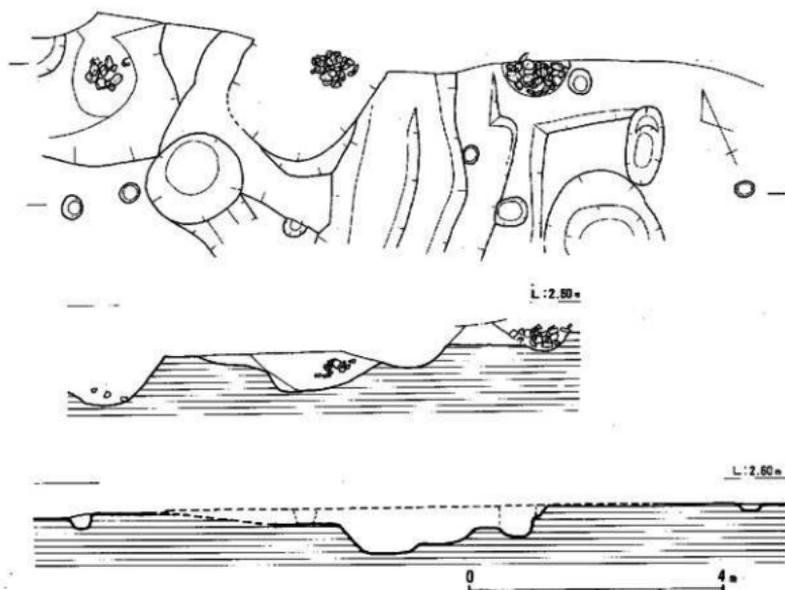
第38图 SE24·38·32实测图(1/40)



第39图 SK04·07·12·19·25·29·31史测图(1/40)



第40图 SK01·07·09·26·27·36实测图(1/20、1/40)



第41図 SA01実測図(1/80)

は不明である。底面の標高0.7mを測る。SE32の井戸枠に接して、径70cm、深さ35cmの桶側の残欠とみられる木質を確認した。SE32にきられ、SE39を切る。井戸枠内から土師器小皿、瀬戸華瓶が出土した。

SE39(第37図、図版11) 東側調査区の西側、SE38の東側で検出した。掘り方の西半部がSE32に切られ、北側は壁面にかかり、調査区外に延びる。復元上面径2.5mを測る略円形の掘り方であったとみられ、深さ1.7m、底面の標高0.5mを測る。基底部には径70cm、深さ1.0mの桶側の残欠とみられる木質が残り、幅10cmの板材を用いていた。掘り方の南東部はSK31、南側はSE33に切られる。

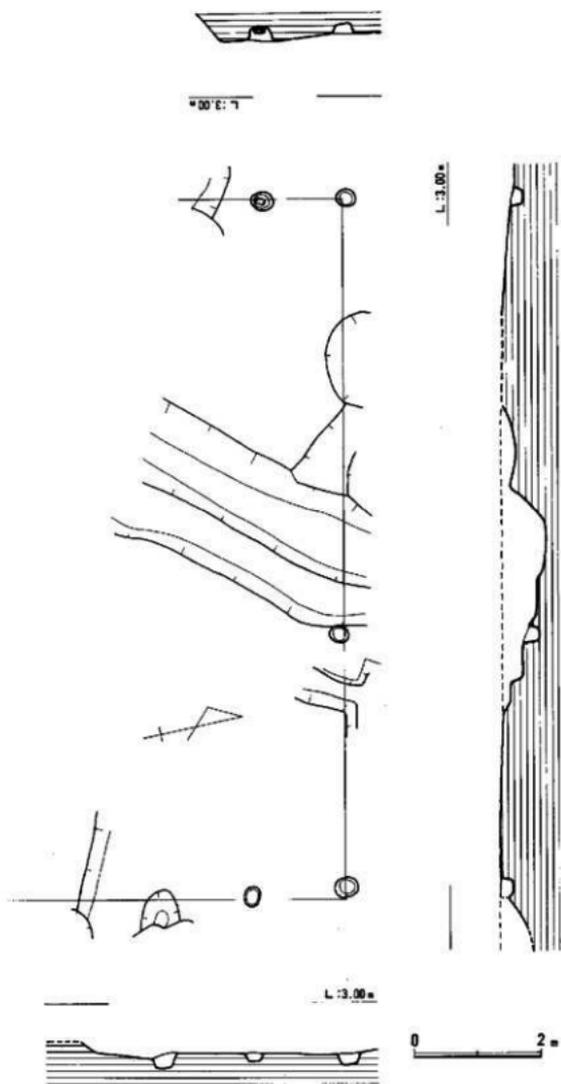
## 2) 土壌

SK01(第40図、図版9) 西側調査区の北西で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、二段に掘られる。東側は壁面にかかり、調査区外に延びる。上面の全長1.5m、幅0.6m以上、深さ90cmを測る。底面の掘り込みも主軸を同じくする隅丸長方形を呈し、全長1.6m、幅0.9m以上、深さ15cmを測る。壁はいずれも斜めに立ち上がる。方位は西偏60°にとる。SK17を切る。

SK04(第39図、図版9) 西側調査区の西端で検出した。平面形は略円形を呈する。径1.5m、深さ0.6mを測る。壁は斜めに立ち上がる。

SK07(第40図、図版9) 西側調査区の中央で検出した。平面形は楕円形を呈する。全長1.4m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位はほぼ真北に取る。

SK12(第39図、図版9) 西側調査区の東側で検出した。平面形は略円形を呈する。径2.0m、深さ



第42图 SB01实测图(1/80)

0.5mを測る。壁は斜めに立ち上がる。

SK19(第39図、図版9) 西側調査区の東南で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。全長1.9m、幅1.4m、深さ0.5mを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位は西偏60°にとる。

SK25(第39図、図版9) 東側調査区の東北で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。全長1.6m以上、幅1.8m、深さ15cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。底面付近で確認された遺構の埋土は灰色粘土で、底面に貼られたものであろうか。方位は東偏60°にとる。土壌の北側は壁面にかかり、調査区外に延びる。SE24、SK26を切る。

SK26(第40図、図版9) 東側調査区の東北端で検出した。土壌の西側はSK25に切られ、北・東側は壁面にかかり、調査区外に延びるため平面形は不明。全長は1.0m以上、深さは0.4mを測る。壁は斜めに立ち上がる。

SK27(第40図、図版9) 東側調査区の東端で検出した。平面形は略円形を呈する。径1.0m、深さ45cmを測る。壁はほぼ直に立ち上がる。東側は壁面にかかり、調査区外に延びる。

SK29(第39図、図版12) 東側調査区の東側で検出した。平面形は略円形を呈する。径0.9m、深さ0.4mを測る。壁はやや直に立ち上がる。土壌の北端で土器器杯が底面より10cm浮いた状態で出土した。土壌裏に供献されたものか。

SK31(第39図、図版9) 東側調査区の東側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。全長1.7m、幅1.3m、深さ0.3mを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位は東偏30°にとる。SE39を切る。

SK36(第40図、図版12) 東側調査区の東側で検出した。平面形は楕円形を呈する。全長2.3m、幅1.3m、深さ0.3mを測る。壁は斜めに立ち上がる。底面には10cm前後の礫が敷かれている。方位は西偏60°にとる。SE24を切る。

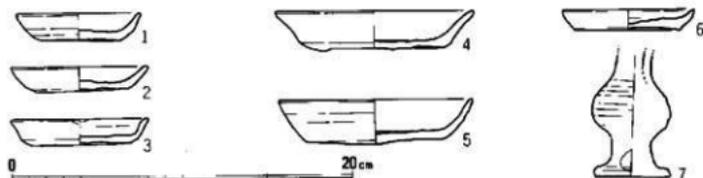
### 3) その他の遺構

#### 柱列

SA01(第41図、図版12) 西側調査区の北端で検出した。1m前後の掘り方内に拳大の礫と集め積み置くビット状遺構3個が3.4mの等間隔に並んでいる。栗石を据えた礎石建て構築物の柱基部分。主軸方位は東偏30°に取る。北側が壁面にかかり調査区外に延びることから、建物である可能性も考えられる。ビット状遺構は西側へ行くにつれて底面が低くなっている。本来の地形の傾斜に沿ったものであろうか。さらに柱列から2.0m南には直径30cm前後の小さな柱穴が3個が3.4mの等間隔に先のビット状遺構3個と平行に並んでいる。深さは10~20cmを測る。建物の庇あるいは構築の際の足場等の仮設構造物の痕であろうか。

#### 掘立柱建物

SB01(第42図、図版9) 西側調査区で検出した。攪乱等により東西方向の柱穴3個が失われているが、大胆にも復元を試みた。南側が壁面にかかり調査区外に延び、南北の柱間距離1.4m前後、東



第43図 出土遺物実測図(1/3)

西の柱間距離2.0m前後の2間×5間以上の東西棟が復元される。柱穴の内1個は根石をもつ。

#### 4) 出土遺物(第43図、図版)

##### SK01出土遺物

土師器 底部は回転糸切離しにより、内底まで横ナデされる。

小皿(1~3) 口径7.4~8.0cm、器高1.5~1.6cm、底径4.6~5.8cmを測る。

杯(4) 口径11.7cm、器高2.2cm、底径7.9cmを測る。

##### SK29出土遺物

土師器 杯(5) 底部は回転糸切離しにより、内底まで横ナデされる。口径11.4cm、器高2.7cm、底径7.8cmを測る。

##### SE38出土遺物

土師器 小皿(6) 底部は回転糸切離しにより、内底まで横ナデされる。口縁端部内面に段がつく。口径7.8cm、器高1.2cm、底径6.4cmを測る。

陶器 華瓶(7) 瀬戸産の華瓶で、口縁部は欠失している。底部は回転糸切離しにより、灰白色の胎土に黄褐色の釉が施されている。

### 3. 結語

今回の調査で検出された遺構の多くは15世紀を主とする時期のもので、さらに細部ができようが、遺構から出土する遺物のほとんどは細片であることに加え、中世後半、15~16世紀における福岡市周辺を含めた地域での出土土器の細かな編年が確立する途上であり、今後の資料の蓄積を待って再考されるべきものであろう。柱列、平面方形の土塋 SK01・19・25・31・36はその主軸を西偏60°に取り、現況の宮崎宮周辺の地割りとほぼ同じくしている。今回の調査区は旧町屋の短冊形区割りに沿ったもので、調査区の西側では建物関連の遺構が、東側では井戸、土塋が検出され、全く異なった様相を呈した。東側調査区は建物裏手の空き地部分に相当すると考えている。

今後調査を積み重ねることによって15世紀、さらに遡る時期の遺構も検出されようが、宮崎宮に付随した町屋の拡がりを追うことができよう。

遺構番号	平面形	規模[長径×短径×深さ(底面高)]	主要な出土遺物	時期
SE24	略円形	3.3m×1.2m×2.4m(1.2m)		—
SE28	—	2.1m×1.0m×—(—)	土師器片	13世紀
SE32	略円形	0.8m×0.7m×1.0m(0.6m)	東播系須恵器	13世紀
SE33	略円形	4.3m×1.2m×1.9m(0.7m)	土師器・青磁片	15世紀
SE34	略円形	2.9m×1.0m×2.0m(0.6m)	青磁碗・盤片	15世紀
SE38	—	3.0m×2.8m×1.9m(0.7m)	土師器小皿、瀬戸	15世紀
SE39	略円形	2.8m×2.1m×1.7m(0.5m)	土師器・青磁片	13世紀
SK01	長方形	1.5m×0.6m×0.9m(1.1m)	土師器小皿・杯	15世紀
SK04	略円形	1.5m×1.3m×0.6m(1.2m)		
SK07	楕円形	1.4m×1.2m×0.4m(0.8m)		
SK12	略円形	2.0m×1.9m×0.5m(0.7m)		
SK19	長方形	1.9m×1.4m×0.5m(1.8m)		
SK25	長方形	1.6m×1.8m×0.15m(2.3m)		
SK26	—	1.0m×1.0m×0.4m(2.1m)		
SK27	略円形	1.0m×0.9m×0.45m(2.1m)		
SK29	略円形	0.9m×0.8m×0.4m(0.8m)	土師器杯	15世紀
SK31	長方形	1.7m×1.3m×0.3m(2.0m)		
SK36	楕円形	2.3m×1.3m×0.5m(2.2m)		

第2表 第13次調査遺構一覧表

押図 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	押図 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	押図 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
SK01				土師器杯				SE38			
土師器小皿				4.	11.7	2.2	7.4	土師器小皿			
1.	7.3	1.6	4.7	SK29				6.	7.8	1.2	6.3
2.	8.0	1.4	5.5	土師器杯							
3.	8.1	1.5	5.7	5.	11.4	2.6	7.8				

第3表 第13次調査出土土師器計測表

# 圖 版



第11次調査作業風景

## 第11次調査



(1)東側調査区全景 (西から)



(2)西側調査区全景 (西から)



(1)西側下面全景（西から）



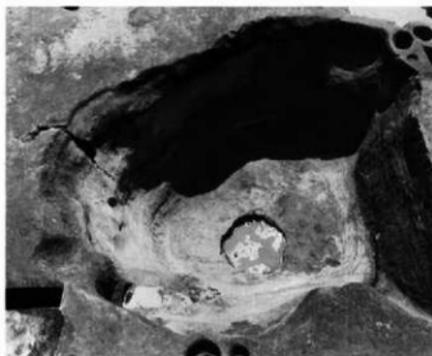
(2)東側調査区北壁土層（南西から）



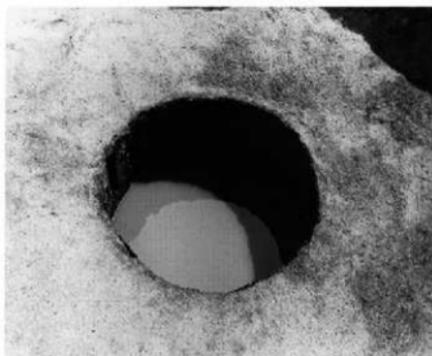
(1) SE002 (南から)



(2) SE002 井筒 (東から)



(3) SE033 (西から)



(4) SE033 井筒 (北から)



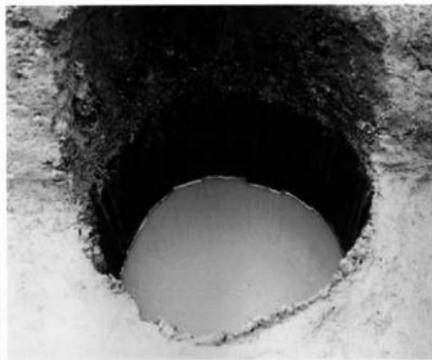
(5) SE037 (西から)



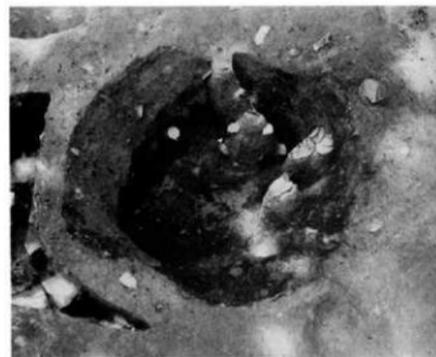
(6) SE037 井筒 (西から)



(1) SE038 (南から)



(2) SE038 井筒 (南から)



(3) SK003 (西から)



(4) SK005 (南から)



(5) SK008 土層 (東から)



(6) SK009 土層 (南から)

## 第11次調査



(1) SK010 (北から)



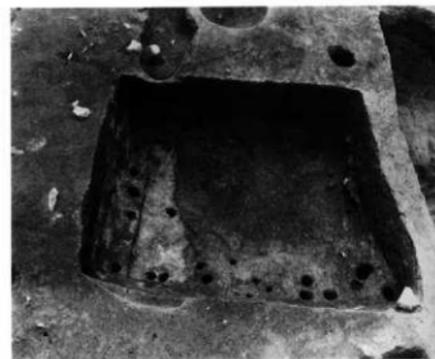
(2) SK028 (北から)



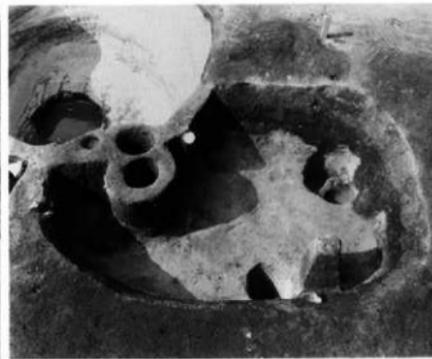
(3) SK029 (東から)



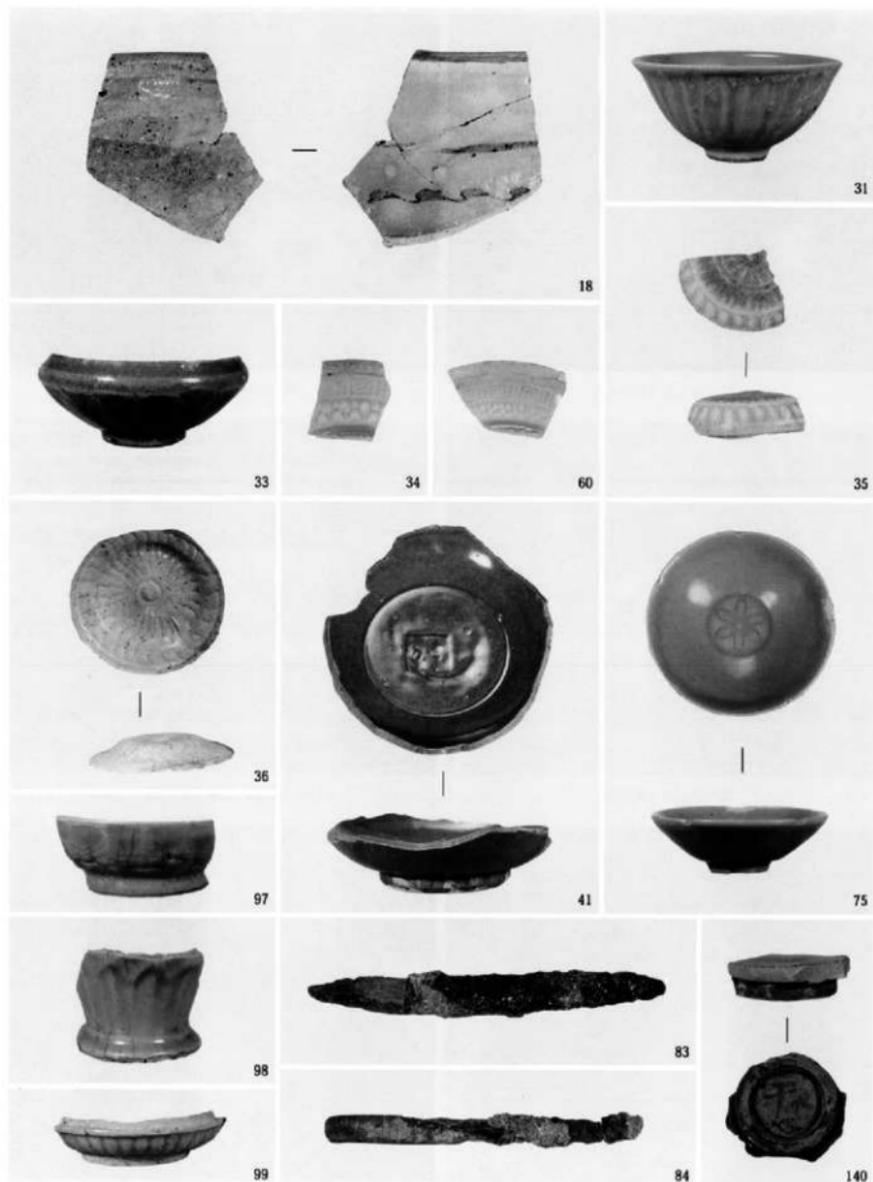
(4) SK029 土層 (北から)



(5) SK029 (東から)

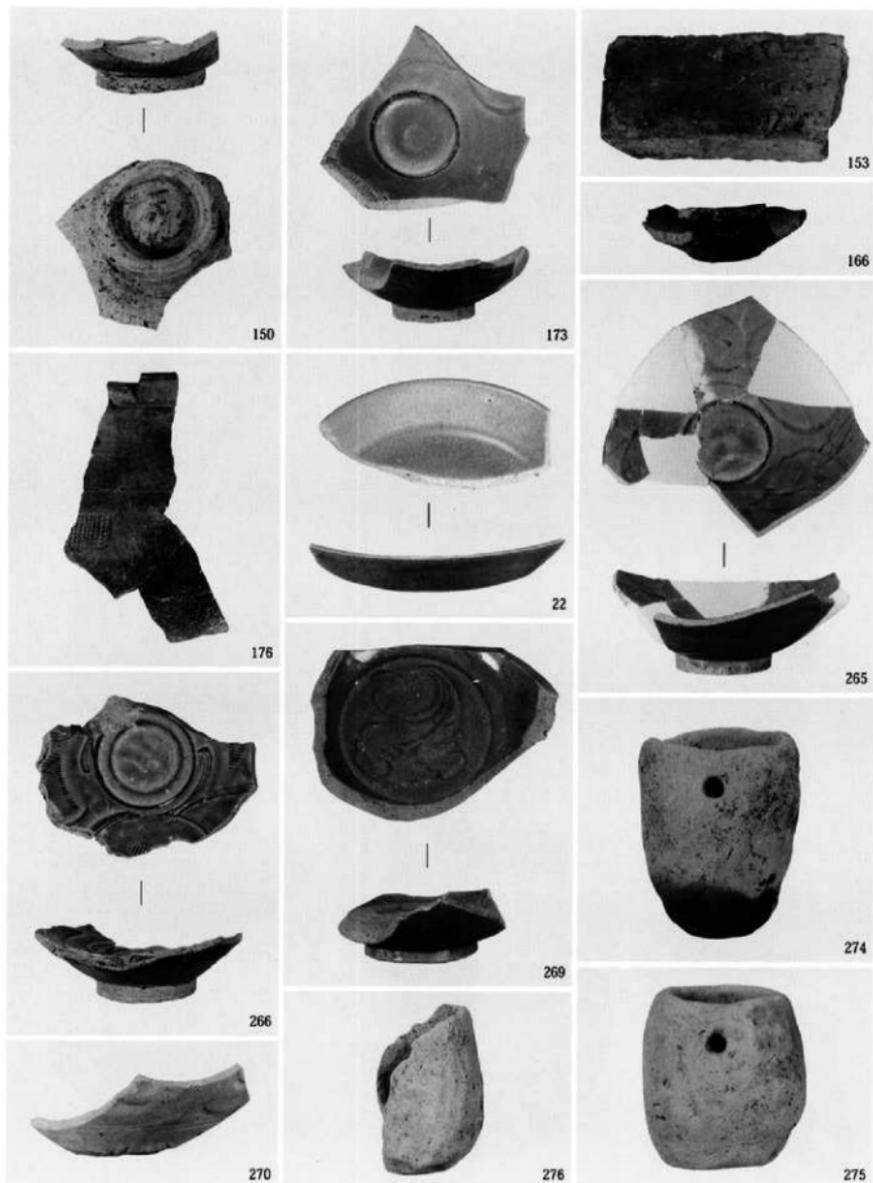


(6) SK034 (南から)

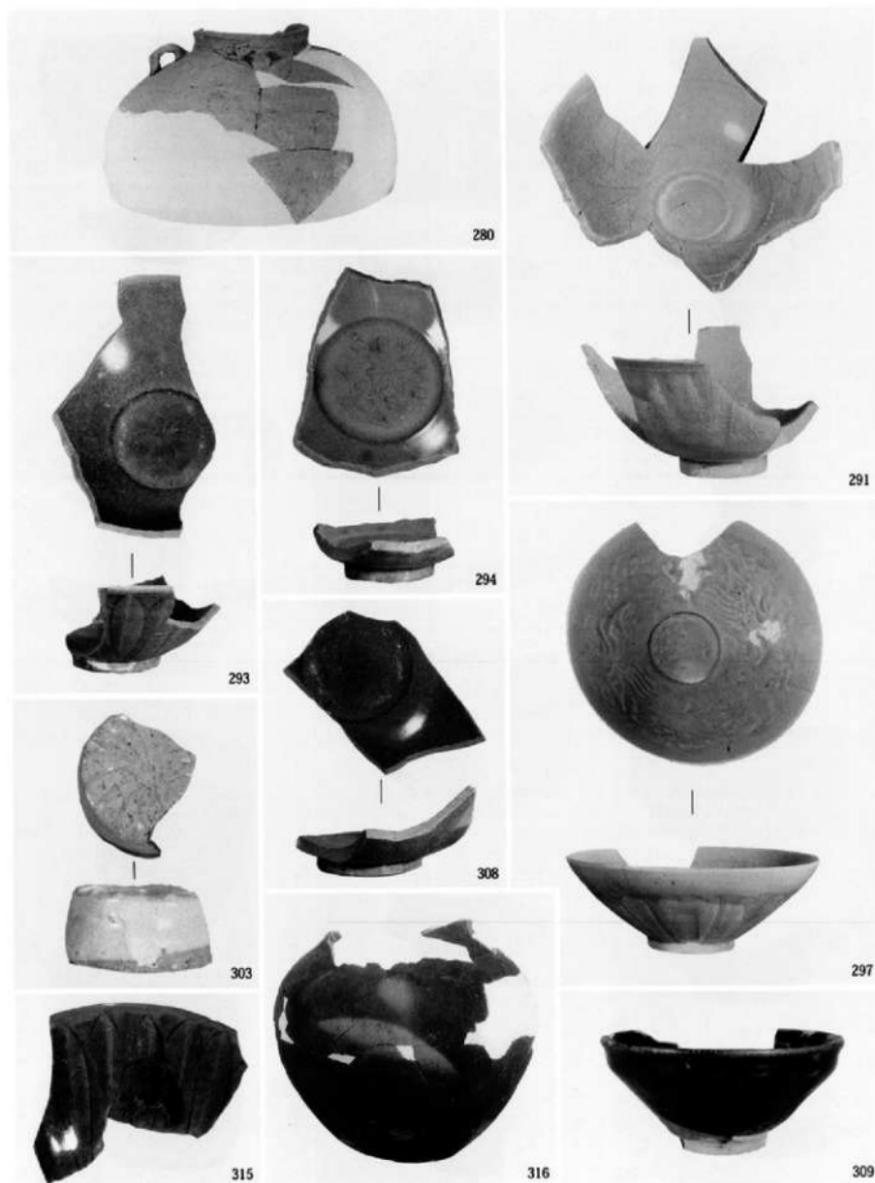


出土遺物 (1)

第11次調査

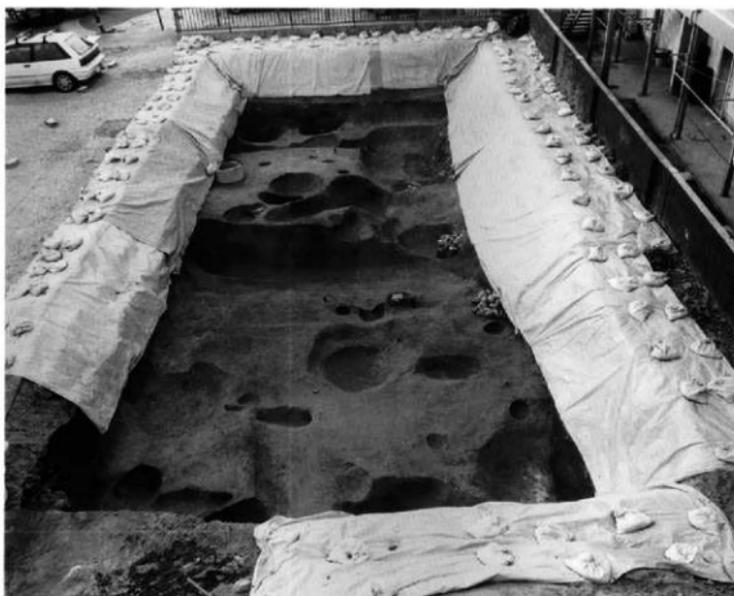


出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

## 第13次調査



(1)西側調査区全景 (東から)



(2)東側調査区全景 (東から)



(3) SE24 井戸 (南から)



(4) SE24 井戸跡 (南から)



(1) SE32 井戸 (南から)



(2) SE32・38・39 井戸 (南から)



(3) SK29 井戸土壇 (南から)



(4) SK36 井戸土壇 (南から)



(1) SE33・34 井戸 (北から)



(2) SE39 井戸枠 (南東から)



(1) SA01 柱穴① (南から)



(2) SA01 柱穴② (南から)



(3) SA01 柱穴②土層 (南から)



(4) SA01 柱穴③ (南から)



1



4



6



2



5



3



7

出土遺物 (5)

---

はこ

ぎ

# 箱 崎 8

—箱崎第11次・13次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第592集

1999（平成11）年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 三協舎印刷所

福岡市東区箱崎埠頭6丁目6番40号

---

